姫路市埋蔵文化財センター調査報告　第12集

姫路城城下町跡

―姫路城跡第286次発掘調査報告書―

平野町52番における姫路城外曲輪 武家屋敷跡の調査

2013

姫路市教育委員会

姫路城城下町跡 ―姫路城跡第二八六次―
姫路市埋蔵文化センター調査報告第一二集
二〇一三
姫路市教育委員会

序

姫路城は本市の象徴であるとともに、我が国を代表する文化遺産の一つです。黒田官兵衛から羽柴秀吉の手を経て、江戸時代の初期に池田輝政により現在の五重六階、地下一階の大天守そびえる姫路城が築かれ、その後 400 年間その歴史を刻み続けています。また平成 21 年度以降 5 年をかけて大天守の保存修理工事を実施し、姫路城を未来に引き継ぐための活動をおこなっております。

姫路城を囲む城下町は、天守を中心に巡らされた三重の堀によって、中枢の置かれた内曲輪、武家屋敷が立ち並んだ中曲輪、町人地・寺社を中心とした外曲輪に区分され、内曲輪・中曲輪の大半が世界遺産及び国の特別史跡として保護・顕彰が図られるとともに、外曲輪では姫路市の中心地として中核市にふさわしい街づくりがなされています。今回は外曲輪の平野町において武家屋敷地の発掘調査を実施し、多くの遺構・遺物を確認しました。ここにその成果を報告し、姫路城城下町跡の調査・研究の進展に資する所存です。

最後に、発掘調査・整理作業の実施にあたり多大なご協力を賜りました株式会社アカシカハウス、その他関係者各位に心から御礼申し上げます。

姫路市教育委員会
教育長　中杉隆夫

例言・凡例

1．本書は姫路市平野町 52 番に所在する姫路城城下町跡（県遺跡番号：020169）の第 286 次発掘調査報告書である。

2．発掘調査は株式会社アカシカハウスによる集合住宅建設に先立つもので、姫路市教育委員会が実施した。

3．確認調査（調査番号：20120123）・本発掘調査（調査番号：20120156）はともに姫路市埋蔵文化財センター　黒田祐介が担当した。

4．発掘調査平面図は世界測地系を使用し、方位はすべて座標北である。また、標高は東京湾平均海水準（T.P.）を基準とした。

5．土層名は、『新版標準土色帳』（1999 年度版）に準拠した。

6．本書で使用した遺構番号は、遺構種ごとにつけた。各遺構種略号は以下のように呼称した。

土坑→SK　　溝→SD　　井戸→SE　　掘立柱建物→SB

なお本書で使用する遺構番号は基本的に調査時のものを踏襲しており、遺構の新旧を示すものではない。

7．文中で遺物の型式や時期区分等を表記する際は、論文著者名の後ろに型式名・時期区分等を記した。

例：焙烙（中川 E 類）　　肥前系磁器染付碗（大橋Ⅳ期）

8．整理作業は、平成 24 年度から 25 年度にかけて姫路市埋蔵文化財センターにて実施した。

9．本書の執筆・編集は、黒田がおこなった。

10．本書に関わる遺物・写真・図面等は、姫路市埋蔵文化財センターで保管している。

11．発掘調査および報告書の作成にあたっては、以下の方々の御援助・御教示をいただいた。ここに感謝の意を表するものである。

株式会社アカシカハウス　有限会社松浦興業　工藤茂博

目　次

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯と体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第２節　調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第３節　姫路城城下町跡における調査地の位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第４節　絵図等からみた調査地・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

第２章　調査の成果

第１節　江戸時代以前の遺構・遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第２節　江戸時代の遺構・遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

第３章　総括　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

表目次

表１　調査地における住人の変遷
表２　遺構基本情報
表３　出土遺物観察表

図版目次

図版１　図１　調査位置図
図版２　図２　調査区平面図
図版３　図３　調査区断面図
図版４　図４　SB1・SB2 平・断面図
図版５　図５　江戸時代の遺構 平・断面図
図版６　図６　SK40・SK4・SD4・SD5・SD11 平・断面図　図７　SE1 平・断面図　図８　SE3 平・断面図
図版７　図９　遺物出土位置図
図版８　図 10　出土遺物(1)
図版９　図 11　出土遺物(2)
図版 10　図 12　出土遺物(3)

写真図版目次

写真図版１　上：調査区西半（南東より）　左下：SD1・2（東より）　右下：SD3（南より）
写真図版２　左上：調査区東半（西より）　右上：掘立柱列１（東より）　右中：掘立柱列１－ピット　左下：SD7（西より）　右下：SD11・SK40（西より）
写真図版３　上：SK1 出土遺物(1)　中：SK1 出土遺物(2)　下：SK5 出土遺物
写真図版４　上：SK25・SK29 出土遺物　中：SK49 出土遺物　下：SD1 出土遺物(1)
写真図版５　上：SD1 出土遺物(2)　中：高台内墨書　下：SD3 出土遺物(1)
写真図版６　上：SD3 出土遺物(2)　下：土師器皿底部
写真図版７　上：SK4・SD4・SD5 出土遺物　中：SE3 出土遺物(1)　下：SE3 出土遺物(2)

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯と体制

姫路市平野町 52 番において、株式会社アカシカハウスによる集合住宅建設が計画された。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である姫路城城下町跡（県遺跡番号：020169）に該当している。このことから平成 24 年（2012 年）7 月 19 日に 26 ㎡を対象として確認調査（遺跡調査番号：20120123）を実施した。その結果、近世の遺構・遺物を確認した。以上から株式会社アカシカハウスとの協議をおこない、建設工事予定地全面を対象として本発掘調査を実施することとなった。本発掘調査の現地調査期間は平成 24 年（2012 年）8 月 21 日から同年 10 月 5 日、調査面積は 579 ㎡である。

現地調査開始から整理作業終了までの体制は、以下のとおりである。

姫路市教育委員会
　　教 育 長　　中杉隆夫
　　教育次長　　林　尚秀
生涯学習部
　　部　　長　　小林直樹
文化財課
　　課　　長　　福永明彦
　　係　　長　　大谷輝彦（調整・事務）
埋蔵文化財センター
　　館　　長　　秋枝　芳
　　係　　長　　岸本幸男（庶務、～平成 25 年 3 月 31 日）
　　森　恒裕（事務）
　　技術主任　　小柴治子
　　中川　猛（調整・事務）
　　福井　優
　　南　憲和
　　技　　師　　堀本裕二
　　関　梓（平成 25 年 10 月 1 日～）
　　主　　事　　嶋田　祐（庶務）
　　技 師 補　　黒田祐介（調査・整理）
　　嘱託職員　　香山玲子、田中章子、玉越綾子、野村知子、三輪悠代
　　整理補助員　　覚野郁子、黒岩紀子、清水聖子、寺本祐子、藤村由紀

第２節　調査の経過

１．確認調査（遺跡調査番号：20120123）

建設工事予定地に均等に調査区を配置した。2×2m の調査区を 4 箇所、1×5m の調査区を 2 箇所の計 26 ㎡である。

調査の結果、工事予定地東半では地表下 0.5m で基盤層を確認した。また部分的に砂礫層が高まっており、その上に明黄褐色土層が堆積している状況がみられた。遺構は大半の調査区で確認しており、特に工事予定

地西半では大型の遺構が確認できた。

２．本発掘調査（遺跡調査番号：20120156）

確認調査の結果をうけて、株式会社アカシカハウスと「姫路市平野町 52 番の開発に伴う埋蔵文化財（姫路城城下町跡）発掘調査委託契約」を締結し、本発掘調査を実施した。調査面積は 579 ㎡である。

発掘調査は 8 月 21 日から 10 月 5 日の実働 30 日で実施した。なお土置き場の関係から調査区西半を調査し、埋め戻し完了後に東半の調査をおこなった。

また調査がほぼ完了した 9 月 29 日には現地説明会を実施し、調査成果の公開をおこなった。約 100 人の参加を得た。

第３節　姫路城城下町跡における調査地の位置

姫路城跡および姫路城城下町跡は、大天守が築かれた姫山を中心に内堀、中堀、外堀の三重の堀で武家屋敷地・町家を囲い込む惣構の縄張りを採用している。

調査地である平野町 52 番は姫路城大天守から南東へ約 1km、外曲輪に位置する。現在残されている絵図によると調査地は近世を通じて武家屋敷地として利用されていたことがわかる（図 1）。

また調査地の西隣は寺町が配置されている。寺町は久長門から南へ約 750m にわたって形成されており、現在でもその名残を色濃く残している。調査地はその南端に隣接している。そのうち調査地と近接する寺院として正法寺・願入寺（近代以降他所へ移転）・妙円寺が挙げられる。正法寺は池田輝政による中曲輪の造成に伴って総社付近から移ってきた寺院である。輝政の治世に移ってきたとされる（『姫路市史』第 14 巻、p.74）。宿分院（願入寺）に関しては天正 4 年（1576 年）に芦屋道海が著した「播磨府中めぐり」に記述があり、姫山の東二反に位置していたことがわかる。その後の内曲輪の造成に伴い他所へ移転したとみられる。ただし、第一次榊原時代（1649～67 年）の「姫路御城廻侍屋鋪新絵図」および第二次松平時代（1667～1682 年）の姫路城下町絵図にはその名は寺町にはみえない。初めて登場するのが第二次本多時代（1682～1704 年）の「本多藤原政武公御時代播州飾東郡国衙庄姫路図」であるため、内曲輪造成時の移転で直ちに寺町に移ったわけではなさそうである。また寺院の敷地を正法寺・妙円寺どちらが分譲したのか、絵図からは判然としない。

第４節　絵図等からみた調査地

調査地は江戸時代を通じて武家屋敷地として利用されており、絵図によると 2 軒の屋敷に該当していることがわかる（図 1）。屋敷地は東側をはしる街路に面しており、屋敷建物も東に偏って建てられていたものと考えられる。街路および建物部分の大半は現在県道 219 号に姿を変えている。

調査区はその 2 軒の武家屋敷にまたがっており、かつ屋敷地の奥側半分に該当している。絵図からは調査地付近の屋敷数の変化はみられないことから、近世を通じて屋敷境の若干の変更はあったとしても、基本の屋敷割は変更されていないと考えられる。

武家屋敷地の住人は大名の入封・転封等に伴って入居・転居するのが通常である。これら住人の姓名等を各種絵図（『姫路市史』第 10 巻・第 11 巻上下付図）から表 1 にまとめた。ただし、参考にした絵図が実際の屋敷割や住人を記したものかは不明であり、その計画図の可能性もある点は注意を要する。

調査地の住人の内、石高が判明しているのは酒井家に仕えた川合又四郎だけで、その石高は 50 石である。その他は石高・役職ともに不明である。ただし、外曲輪に屋敷をもっていることから中・下級武士として大過はないと考える。

第２章　調査の成果

以下では江戸時代以前と江戸時代に分けて遺構の検討をおこなう。なお、遺構の説明は年代順ではなく、調査時につけた遺構番号の順に記述する。

第１節　江戸時代以前の遺構・遺物

SB1〔図 4〕　調査区東半で検出した。南北 5 間・東西 3 間の掘立柱建物である。約 N9°E を主軸とする。柱穴は 13 基を確認した。砂礫層（基盤層）が高まっている箇所は柱穴の掘方が深く掘り下げられていないことに加え、撹乱や近世の遺構のために 11 基の柱穴を欠く。柱穴の掘方径は 0.3～0.4m、深さは 0.2～0.3m を測る。柱痕を確認したのは南東角の柱穴のみで、径 0.2m である。根石や根固石は確認していない。埋土の色調は灰白色を呈する。出土遺物は乏しく、時期は特定できない。

SB2〔図 4〕　SB1 の南西隅で検出した。SB1 との切り合い関係は不明である。南北 2 間・東西 1 間の掘立柱建物である。SB1 と同様、約 N9°E を主軸とする。柱穴は 4 基確認した。砂礫層が高まっていることに加え、撹乱によって柱穴 2 基を欠く。柱穴の掘方径は約 0.3m、深さは約 0.1m を測る。柱痕や根石、根固石は確認していない。埋土の色調は灰白色を呈する。出土遺物は乏しく、帰属時期は特定できない。

SD8〔図 2〕　調査区東半東壁沿いで検出した。中央部に撹乱をうける。他の遺構との切り合い関係はない。幅約 0.5m、深さ約 0.3m を測る。主軸は SB1・SB2 の主軸と直交する。埋土の色調は灰白色を呈する。出土遺物は乏しく、帰属時期は特定できない。

第２節　江戸時代の遺構・遺物

今回確認した遺構は掘立柱列 2 条、土坑 47 基、井戸 5 基、溝 14 条である。礎石など、建物に直接関連する遺構は確認していない。紙幅の関係から遺構個別の基本情報は表 2 に譲ることとし、本節では特に重要な遺構・遺物についての記述をおこなう。

掘立柱列 1〔図 2・5，写真図版 2〕　調査区東半、SE4 の南で検出した。柱穴は 5 基確認した。いずれも径約 0.3m の円形の掘方を持ち、深さ約 0.2m を測る。また全ての柱穴で一辺約 0.1m の方形柱痕を確認した。

遺物は出土しなかった。屋敷境として機能したと考えられる。

掘立柱列 2〔図 2〕　掘立柱列 1 の 0.5m 南で検出した。柱穴は 3 基確認した。いずれも径約 0.3m の円形の掘方をもち、深さ約 0.2m を測る。

遺物は出土しなかった。屋敷境として機能したと考えられる。

SK1〔図 2・5・9・10，写真図版 3・5〕　調査区西半で検出した。SK2・SK3 を切る遺構である。南側の一部が撹乱をうける他は良好に残存していた。平面形は径約 2.3m の円形を呈し、深さは 0.8m を測る。側面は急角度、底面は比較的平坦で、断面「凵」字形を呈する。埋土は 3 層からなる。2 層は砂礫からなり、最も厚く堆積している。含まれる礫は径約 10cm の円礫が主体で、基盤層である砂礫に由来する土層であると考えられる。瓦・陶磁器が多量に含まれていた。

出土遺物の大半が 2 層に帰属する。遺物には墨書のある京・信楽系施釉陶器碗や瀬戸・美濃焼拳骨碗のほ

か、瀬戸・美濃焼志野向付や肥前系陶器片口、肥前系磁器染付（大橋編年Ⅳ）等がある。京・信楽系施釉陶器碗の墨書は図 10－1 に高台内「勘」、2 に高台内「勘」、高台外周「未十二月四日」、3 に高台内「勘九」である。いずれも 18 世紀後半に位置づけられる。また志野向付（図 10－6）のうち SK1 出土の破片は 1 点のみで、大半は SK19 出土である。本来 SK19 に帰属していたものが何らかの原因で流入した可能性が高い。

SK5〔図 2・5・10，写真図版 3・5〕　調査区西半、SK2 の南側で検出した。SK2 に切られ、部分的に撹乱をうける。撹乱のため全形を知ることはできないが、遺構の南辺・東辺の輪郭線から一辺約 5m の方形を呈すると考えられる。部分的に深まっている箇所は長軸約 3m・短軸約 2.5m の楕円形を呈し、深さは約 0.4m を測る。埋土は 3 層からなり、深まった箇所には 10・11 層が堆積していた。この深まった箇所とその周囲に広がる埋土が別の遺構となる可能性もあったが、遺物が接合関係にある点と 9 層が 10・11 層を切り込むような堆積をしていないことから同一の遺構として報告する。なお 10 層には平瓦が非常に多く含まれていた。

出土遺物には墨書のある京・信楽系施釉陶器碗や施釉陶器碗のほか、備前焼擂鉢（乗岡近世 4 期）、丹波焼片口、肥前系磁器染付碗（大橋Ⅳ期）等がみられる。これらは概ね 18 世紀後半の時期を与えることができる。特に京・信楽系施釉陶器碗（図 10－8）には高台内「勘九」、高台外周「安永九年庚子烋九月二日請取之」の墨書がみられ、安永九年が 1780 年にあたることからも年代的に整合しているといえる。

SK12〔図 2・10〕　調査区西半、SD6 北端付近西側で検出した。他の遺構との切り合い関係はない。平面形は長軸約 0.9m、短軸約 0.6m のやや不整の楕円形を呈する。深さは約 0.1m で、埋土に焼土や炭を含む。比較的浅い遺構の残骸であろうか。

遺物には施釉陶器蓋（図 10－10）がある。蓋内面には人物の顔が描かれている。達磨であろうか。

SK13〔図 2・9〕　調査区東半、北西隅で検出した。SK34・SD7 を切る遺構である。一部調査区外に広がるため全形を知ることはできないが、径約 3.2m の円形を呈するものと考えられる。深さは 0.7m を測り、側面は緩やかな傾斜をもって底につながる。底は比較的平坦で、砂礫層に達する。

出土遺物には京・信楽系施釉陶器碗、同片口、陶器擂鉢、肥前系磁器染付碗・皿（大橋Ⅳ期）等がある。遺物総量が多くないため断定はできないが、概ね 18 世紀後半の時期を与えることができよう。なおこの遺構から出土した京・信楽系施釉陶器碗 2 点のうち 1 点は、SD1 出土の個体（図 11－25）と接合している。屋敷境を越えて遺物が移動した原因は不明であるが、SD1 から SD7 へ流されたと考えることもできる。

SK14〔図 2・5〕　調査区東半、北東隅で検出した。SK55・SD7 を切る遺構である。遺構の大半が調査区外であるため、平面形や規模は不明である。深さは約 0.2m を測る。遺構の外周には平瓦が立て並べられており、底面は平坦であった。遺構の性格は不明である。

遺物は少なく、時期の特定は困難である。肥前系磁器染付碗（大橋Ⅳ期、コンニャク印判）や柿釉灯明皿等が出土した。

SK25〔図 2・5・10，写真図版 4・6〕　調査区南東部で検出した。SK24 に切られる。西半は撹乱をうけており、本来の規模は不明であるが径約 2m の円形の土坑であったと推定できる。深さは 0.15m である。

出土遺物には肥前系陶器皿（胎土目）と土師器皿がある（図 10－11・12）。12 は見込みから口縁部にかけて煤が付着しているため、灯明皿として使用されたことがわかる。底部にはヘラ切りに伴う粘土の皺が認められる。器表は白色を呈する。これらには概ね 17 世紀前半期の時期を与えることができる。

SK29〔図 2・5・10，写真図版 4〕　SK25 直北で検出した。SK26 に切られる遺構である。西端は撹乱をうけている。東西 2.8m 以上、南北 1.4m の楕円形ないし長方形を呈すると考えられる。深さは 0.2m を測る。

出土遺物には肥前系陶器碗（図 10－13）、同皿（14）、土師器皿（15～18）がある。15 の内面にはわずかながら煤が付着しているため、灯明皿として使用されたことがわかる。底部は非糸切りで、器表は白色を呈する。口縁部外面から内面にかけて回転ナデが施される。16～18 のうち 17 のみ口縁部に煤の付着が認められる。器表は全て橙色を呈し、外面底部と見込み以外は回転ナデで仕上げられている。底部は 17 がナデ調整、16・18 の底部には板目状の圧痕がみられ、これは底部を整えた板状工具の痕跡の可能性がある。これらには概ね 17 世紀前半期の時期を与えることができる。

SK49〔図 2・5・11，写真図版 4・5〕　調査区中央で検出した。SK45 に切られる遺構である。東側に撹乱をうける。平面形は不整形で、深さは最深部で約 0.4m を測る。なお西側の一画は深さ約 0.1m と非常に浅い。

遺物は多く出土している。京・信楽系施釉陶器碗や瀬戸・美濃焼陶胎染付碗、瀬戸・美濃焼拳骨碗、青磁香炉（蛇ノ目凹形高台）、肥前系磁器染付碗（大橋Ⅳ期）、土師器灯明皿、土師器火消壺、炮烙（中川 E 類か）等がある。これらは概ね 18 世紀後半の時期を与えることができる。京・信楽系施釉陶器碗は 7～8 個体が出土しており、うち 3 点に墨書が確認できた。図 11－19 は高台内に「勘」、20 は高台内に「勘正」、高台畳付に「一月十一日」、21 は高台内塗潰しで高台畳付に「明和□□年九月十二日」と書かれている。「明和」は 1764 年から 1772 年にかけて使用された年号で、他の遺物の時期とも矛盾はない。

SK4・SK40・SD4・SD5・SD11〔図 2・6，写真図版 2・7〕　調査区東半から西半にかけて検出した。SK40 は方形の土坑で、側面がほぼ直角に立ち上がる。その東側に SD11 が取り付いており、底の標高は SK40 に向かって下がっている。また SK4 は一部輪郭線が不明な箇所があるが、SK40 と類似した方形の土坑であると考えられ、その間をつなぐように SD4 が取り付いている。SD4 の底は SD11 より約 0.3m 低く、SK4 の底の標高は SD4 より約 0.3m、SK40 より約 0.6m 低い。

遺物は多くないため時期の特定は困難である。SK4 では焙烙（中川 H 類）等が出土した。SD5 では備前焼擂鉢（乗岡近世 4c 期か）、丹波焼甕、柿釉灯明皿、磁器染付小杯等が出土した。これらから 18 世紀末以降の年代を与えることができる。その他の遺構では遺物が極端に少ないため、時期は不明とせざるを得ない。

遺物から全ての遺構の同時性を示すことはできないが検出状況等から以下の可能性が考えられる。先述の通り SK11→SK40→SD4→SK4 の順で底の標高が低くなっていることから、水を引き入れてそれを土坑に溜めるような機能をもった一連の遺構である可能性がある。ただし、SK4 以降の水の流れが明確ではない。SD5 で排水をおこなうか、もしくは排水溝が SD1 等により破壊された可能性が残される。SD5 から排水したと考える場合、屋敷境を越えて排水がなされることになるが、姫路城城下町跡の調査ではそのような例は確認されていない。評価は今後の類例の増加を待たざるをえないが、今回の調査で敷地境を越えて SD1・SD2 が延びている状況が確認されており、可能性としては否定できない。

SE1〔図 2・7〕　調査区東半、東壁沿いで検出した。掘方の一部は調査区外である。石組が残されていたのは標高 13m 以下で、それ以上は砂礫で埋め戻されていた。掘方は円形で径約 1.6m を測る。石組内法径は 0.7m で、比較的掘方が大きいタイプである。底の標高は 10.4m である。石組には円礫が用いられている。

遺物はいずれも井戸内埋土からの出土である。肥前系磁器染付碗（大橋Ⅲ期）、青磁皿、備前焼擂鉢（乗岡近世 3 期以降）、施釉陶器碗、焙烙（中川 E1 類）、土師器灯明皿（底部糸切）、砥石等がある。肥前系磁器染付碗は一重網目文のほか型紙摺りがみられる。これらは概ね 17 世紀後半から 18 世紀前葉の時期を与えるこ

とができる。このほか肥前系陶器皿（胎土目）や肥前系磁器染付皿（大橋Ⅱ期）などもある。また漆膜が出土しているため、漆器も含まれていたと考えられる。

SE3〔図 2・8，写真図版 7〕　調査区東半、南壁寄りで検出した。上部に撹乱をうける。南側の石組は比較的残りがよかったものの、石組が全周するのは標高 11.9m 以下である。掘方は円形で径約 2m を測る。また石組内法径は約 1m で、石組に対して掘方が小さいタイプである。

遺物はいずれも井戸内埋土からの出土で、掘方からの出土はなかった。遺物には青磁香炉（蛇ノ目凹形高台）、肥前系磁器染付碗（大橋Ⅳ期、コンニャク印判）、肥前系陶器片口、京焼風陶器碗（高台内刻印なし）、陶器灯明皿、関西系焼締陶器擂鉢（白神Ⅰ型式）、丹波焼擂鉢（大平Ⅷ型式、川口Ⅲ－Ⅱb 期）、備前焼擂鉢（乗岡近世 4b 期）、土師器皿、炮烙（中川 E3 類）、砥石、硯等がある。京焼風陶器碗は同法量で見込みの山水文も同じものが 9 点出土しており、セット関係にあったものがまとまって廃棄されたとみられる。これらには概ね 18 世紀前葉から中葉の時期を与えることができる。

SD1〔図 2・5・11，写真図版 1・4・5〕　調査区西半中央で検出した。SK7 を切る遺構である。SK4・SD2 との切り合い関係は不明である。幅は約 1.2m を測り、深さは北半で 0.6m（標高約 11.9m）、南半で 0.3m（標高約 12.4m）である。北に向かって底の標高が下がっている。南北方向に一直線に延びているが、北端部が大きく北東方向に屈曲していることから、調査区外で SD7 と接続している可能性がある。

出土遺物は非常に多い。肥前系磁器染付碗・皿（大橋Ⅳ～Ⅴ期）、磁器染付花生、青磁染付皿（蛇ノ目凹形高台）、瀬戸・美濃焼拳骨碗、同鎧茶碗、同練鉢（藤澤第 9 小期）、同鬢盥、陶器鉢、丹波焼鉢、備前焼布袋徳利、施釉陶器油徳利、京・信楽系施釉陶器碗、土人形、土師器灯明皿等がある。土人形は人物の他、恵比寿がある。京・信楽系施釉陶器碗は 4 個体出土しており、内 1 点（図 11－25）は SK13 出土の破片と接合している。また 25 に高台内「勘」、高台内周「□六月二日」、高台外周「㊀永三□六月二日」　27 に高台内「勘十」の墨書がみられ、26 についても判読はできないが墨書の痕跡が認められる。これらには概ね 18 世紀後半から 19 世紀前葉の時期を与えることができる。この他にガラス玉が 1 点出土している（写真図版 5）。表面の風化が進行しており、江戸時代以前のものである可能性が高い。

SD2〔図 2・5，写真図版 1〕　調査区西半、SD1 の西側で検出した。SK6 を切る遺構である。SD1 との切り合い関係は不明である。幅は約 0.4m を測り、深さは 0.2m である。底の標高は約 12.4m でほぼ一定している。南北方向に一直線に延びているが、北端部では北東方向に屈曲する兆しをみせる。SD1 と同様に調査区外で SD7 と接続している可能性がある。出土遺物は少なく、時期は不明である。

SD3〔図 2・5・11・12，写真図版 1・5・6〕　調査区西半、西壁沿いで検出した。幅は北半で 1.2m、南半で 1.7m を測る。深さは 0.7m（標高 11.9m）前後で、底は凹凸が目立つものの標高は概ね一定している。南北方向にほぼ一直線に延びているが南端で西方向に枝分かれしている可能性がある。埋土には基盤層等がブロック状に含まれるため、人為的に埋め戻されたと考えられる。

出土遺物には肥前系陶器天目碗（図 11－29）、軟質施釉陶器碗（30）、瀬戸・美濃焼志野小杯（31）、肥前系陶器皿（32・33）、備前焼擂鉢（34）、同小壺（35）、銅銭（36）、土師器皿（図 12－37～74）がある。出土遺物には概ね 17 世紀第 1 四半期から第 2 四半期の時期を与えることができる。

特に土師器皿は多量に出土しており、そのうち図化に耐えうる 38 点を図化した。これらは底部切り離し方法と底部調整、器形により大きく 7 つの型式に分類できる。

37～49 は底部非糸切の土師器皿で、器表は白色を呈する。法量から口径 14cm 前後（37～41）と口径 11cm 前後の個体（42～48）に細分が可能である。大型の個体は内外面に黒斑がみられ、39 は内面全体に煤が付着している。小型の 42・44 には口縁部に煤が付着していることから灯明皿として使用されたことがわかる。外面底部は明瞭な調整痕は認められず、口縁部外面から内面にかけて回転ナデが施される。回転ナデに伴う皿の回転方向は反時計回りのみである。47 のみは外面の回転ナデの範囲が極端に狭い。見込み部分は静止ナデが顕著で、成形手法との関連からか底部が凹むものが多い。

50～53 は底部非糸切の土師器皿で、器表は橙色を呈する。口縁部への煤の付着は認められない。外面底部は軽いナデで仕上げられており、51～53 には板状工具の角らしき圧痕が 1 条みられる。作業台から取り外し易くする工夫であろうか。そのためか底部はやや尖り気味である。回転ナデは外面底部と内面見込み以外に施されており、外面底部との境には緩い段がつく。回転ナデに伴う皿の回転方向は時計回りのみである。

54 は底部ヘラ切りの土師器皿で、胎土は橙色を呈する。口縁部に煤が付着している。外面底部はナデで整えられているが、わずかにヘラ切りに伴う粘土の皺が認められる。内外面は回転ナデが施され、内面見込み部分にはオサエが顕著である。回転ナデに伴う皿の回転方向は時計回りである。

55～62 は底部非糸切りの土師器皿で、器表は橙色を呈する。57・61 は焼成不良のためか白色に近い。口縁部への煤の付着は認められない。外面底部は丁寧なナデのため切り離しに伴う痕跡は認められないが、底部が尖り気味であるためヘラ切りであると推測できる。底部と口縁部の間で明瞭な屈曲がある 59・60 は別に分類すべきかもしれない。

63～65 は底部非糸切りの土師器皿で、器表は橙色を呈する。63・64 には口縁部に煤が付着していることから灯明皿として使用されたことがわかる。外面底部と見込み以外は回転ナデが施されており、回転ナデに伴う皿の回転方向は反時計回りである。外面底部には板目状の圧痕がみられ、63・65 に関してはそれが交差している。底部を整えた板状工具の痕跡であろうか。見込みは静止ナデで整えている。

66～69 は底部糸切りの土師器皿で、器表は橙色を呈しているが 69 のみ焼成不良のためか白色を呈する。回転ナデと糸切りは時計回りで統一されている。底部が高台状になっている点が特徴的である。

70～72 は底部糸切りの土師器皿で、器表はにぶい橙色を呈する。口縁部が直線的にのびるタイプである。外面底部と見込み以外は回転ナデが施され、回転方向は糸切り時と同様に時計回りで統一されている。

73・74 は上記のグループには当てはまらない。ともににぶい橙色を呈する、底部糸切りの土師器皿である。74 は口径に比べ器高が高い。

SD7〔図 2，写真図版 2〕　調査区東半、北壁沿いで確認した溝群の総称である。SK34 を切り、SK13・SK14 に切られる。北壁沿いに広がっていた遺構埋土を除去した結果、小規模な溝 4 条を確認した。これらの溝自体は切り合い関係になく、溝埋土の上にほぼ同質の土が広範囲に堆積することで完全に埋没していた。またこれらの溝は分流・合流することによりそれぞれがつながっている。SD7 検出面からその底、小規模な溝の検出面までの深さは 0.3m である。SD7－1 は SD7 ほぼ中央を東西に伸び、西端が北西方向にゆるやかに屈曲する。幅約 0.4m、深さ約 0.2m を測る。SD7－2 は SD7 南端を東西に伸び、西端で SD7－1 と接続する。幅 0.4m、深さ 0.1m を測る。SD7－3 は幅 0.4m、深さ 0.1m を測る。SD7－4 は SD7 東半で SK42・SE5 をかすめるように大きくカーブを描き、調査区外に抜ける。また SK42 の東側で北方向に枝分かれしており、SE5 南側では SD7－1 にむかって溝 2 条が枝分かれしている。幅 0.3m、深さ 0.2m を測る。底の標高は SD7－4 のみ東に向かって下がる傾向があるが、それ以外は一定である。

出土遺物には瀬戸・美濃焼腰錆碗、関西系焼締陶器擂鉢（白神 I 型式）、肥前系磁器染付碗、焙烙（中川 E2 類）、鳥形の土人形等がある。遺物が少ないため、詳細な時期は不明とせざるを得ない。

第３章　総括

今回確認した遺構は 17 世紀前半から 19 世紀までの江戸時代全時期に加え、江戸時代以前のものも含まれている。そのうち SK25、SK29、SD3 からは 17 世紀前半期の遺物が出土した。近年外曲輪における発掘調査件数が増加しており、成果の蓄積が進んでいる中で外曲輪から江戸時代初期の明確な遺構が見つかったのは今回が初めてで、かつ大量の遺物が出土しているなど、外曲輪の形成を考える上で重要な成果といえる。

調査地が 2 軒の武家屋敷に該当していることが絵図からは読み取れたが、実際に屋敷境として機能したとみられる掘立柱列 1・2 がみつかり、絵図を追認することができた。この屋敷境をこえる遺構として SD1・SD2 等がある。これは姫路城城下町跡において例外的な事象である。絵図や諸記録には記載はないが、18 世紀後半以降に屋敷割の変更があり、2 軒の屋敷が統合され、その後開削されたという可能性もある。また西側寺院との背割溝として SD3 があるが、これは 17 世紀前半で埋まる。この現象は中曲輪の武家屋敷とも共通している。

遺構からは多量の遺物が出土した。そのうち特徴的であったのが墨書のある京・信楽系施釉陶器碗である。同一形態のものが SK1 で 6 個体、SK5 で 1 個体、SK49 で 7（8）個体、SD1 で 4 個体（SK13 のものと接合 1 点）、SK13 で 1 個体の計 19 個体が屋敷境以南に集中して出土した。図化したものはそのうち 12 個体で、そのうち墨書がみられるのが 10 個体である。この墨書をまとめると、

1：高台内「勘」　2：高台内「勘」、高台外周「未十二月四日」　3：高台内「勘九」　8：高台内「勘九」、高台外周「安永九年庚子烋九月二日請取之」　19：高台内「勘」　20：高台内「勘正」、高台外周「一月十一日」　21：高台内塗潰し、高台外周「明和□□年九月十二日」　25：高台内「勘」、高台内周「□六月二日」、高台外周「囡永三□六月二日」　27：高台内「勘十」

となる（図 9・10・11、写真図版 5）。共通点としては高台内に「勘」が記入されており、また多くの場合高台外周に文字が記されている点があげられる。8・20・27 は「勘」の後ろに漢数字がつく。そのうち 8 は「勘九」と「九月」、20 は「勘正」と「一月」となっており、「勘」の後ろの数字と高台外周に記された月が共通しているようにも思われる。ただし、今のところ「勘」が人名に関わるのか、他の意味があるのかは定かではない。なお同一形態ではないものの高台内に「勘七」と書かれたものもある（図 10－7）。

先行研究（山本 1999）によると、調査地を古代山陽道が通ると推定されているが、今回それに関連する遺構は認められなかった。後世の削平で失われた可能性もあり、今後調査の進展が待たれる。

【引用・参考文献】　※発掘調査報告書に関しては紙幅の関係から割愛した
大平　茂 1992「まとめ」『下相野窯址』（兵庫県文化財調査報告第 107 集）兵庫県教育委員会
岡本直久・青木　修編 2002『江戸時代の瀬戸窯』（財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター企画展図録）財団法人瀬戸市埋文化財センター
岡本直久編 2005『江戸時代の瀬戸・美濃―三都と名古屋―』（平成 17 年度瀬戸市埋蔵文化財センター企画展図録）財団法人瀬戸市文化振興財団
大橋康二 1989『肥前陶磁』（考古学ライブラリー55）ニュー・サイエンス社
川口宏海 1998「有岡城跡・伊丹郷町遺跡出土の近世丹波焼製品」『楢崎彰一先生古希記念論文集』楢崎彰一先生古希記念論文集刊行会
九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』（九州近世陶磁学会 10 周年記念）
白神典之 1992「堺摺鉢考」『東洋陶磁』第 19 号 東洋陶磁学会
中川　猛 2012「焙烙考―姫路と周辺の焙烙について―」『山口大学考古学論集』（中村友博先生退任記念論文集）中村友博先生退任記念事業会
乗岡　実 2002「第 3 節　近世備前焼擂鉢の編年案」同編『岡山城三之曲輪跡』岡山市教育委員会
長谷川　眞 2010「近世丹波焼の成立に関する覚書」『兵庫県陶芸美術館研究紀要』第 5 号 兵庫県陶芸美術館
姫路市史編集専門委員会編 1999『姫路市史』第 10 巻 姫路市
藤澤良祐（瀬戸市史編纂委員会）編 1998『瀬戸市史』陶磁史篇六 愛知県瀬戸市
森　恒裕 1991「淳心学院出土遺物の検討―16 世紀後半から 17 世紀初頭における姫路城下町の様相に関する予察―」『城郭研究室年報』vol.1 日本城郭研究センター
森　恒裕 1994「市立城南小学校から出土した 17 世紀前半期の遺物について」『城郭研究室年報』vol.4 日本城郭研究センター
山本博利 1999「播磨国府と国分僧寺」播磨学研究所編『地中に眠る古代の播磨』 神戸新聞総合出版センター

表１　調査地における住人の変遷

時期	年代	絵図名	屋敷の位置	姓名	備考
1次榊原時代	1649～1667年	姫路御城廻侍屋敷新絵図	北	小森大左衛門	
			南	中野甚右衛門	
2次松平時代	1667～1682年		北	野口惣衛門	
			南	小樽藤衛門	
2次本多時代	1682～1704年	本多藤原政武公御時代播州飾東郡国衙庄姫路図	北	内藤甚左衛門	
			南	松出与一郎	
	不明		北	不明	
			南	橋本庄太夫　同与一郎	
2次榊原時代	1711年	幡州姫路御城下之図	北	不明	
			南	不明	
酒井時代	1749年～（入封初期）	白鷺城旧図	北	川合又四郎	石高50石
			南	小沢勘左衛門	
	18世紀後半頃	姫路侍屋敷図	北	川合又四郎	
			南	塩沢	『白鷺城旧図』では川合又四郎宅北隣りの住人（甚蔵）、その屋敷が正法寺境内となったため転居してきたのか
	文化3年（1806）		北	大内兵馬	
			南	田崎藤右衛門	

表２　遺構基本情報

遺構番号	切り合い関係	平面形	規模（m）	深さ（m）	備考
SK1	○SK2・3	円	2.3	0.8	側面は急角度、底は比較的平坦、2層を中心に遺物出土
SK2	○SK3・5		南北3	0.6	
SK3	×SK2			0.1	
SK4	○SD4	方?	東西4 南北2.5	0.6	
SK5	×SK2　○SD5	方?	5	0.4	
SK6	○SD2	円?	1.2	0.2	
SK7	×SD1	円?	2.5?	0.6	
SK8		隅丸方	1.6	0.2	
SK9		円	1.8	0.2	
SK10	×SD6			0.4	遺物は極少
SK11		円	0.9	0.1	漆喰塗り、便槽、遺物は極少
SK12		楕円	長軸0.9 短軸0.6	0.1	埋土に炭・焼土を含む、遺物は極少
SK13	○SK34・SD7	円?	3.2	0.7	
SK14	○SK55・SD7			0.2	外周に平瓦を立て並べる
SK15					欠番
SK16					欠番
SK17		楕円	長軸0.6 短軸0.4	0.1	
SK18		楕円	長軸1 短軸0.5	0.2	
SK19		楕円	長軸2.8以上 短軸1	0.4	撹乱により埋土が乱されている、出土した志野向付はSK1の破片と接合、出土遺物は瀬戸・美濃焼志野向付・肥前系陶器大皿（三島手、砂目）・同刷毛目碗・土師器皿（底部糸切りと非糸切りあり）
SK20	？SD7	方	0.5	0.45	側面ほぼ垂直
SK21					欠番
SK22	×掘立柱列	円	1	0.1	遺構の残骸か
SK23		楕円	長軸0.9 短軸0.5	0.2	
SK24	○SK25	不整	東西1.9	0.15	遺構の残骸か
SK25	×SK24	円?	南北1.8	0.15	確認調査で確認
SK26	○SK29	楕円？	長軸1.8以上 短軸1.1	0.5	

遺構番号	切り合い関係	平面形	規模（m）	深さ（m）	備考
SK27		不整	長軸2.2以上 短軸1.6	0.1	遺構の残骸か
SK28					欠番
SK29	×SK26	楕円	長軸2.8以上 短軸1.4	0.2	
SK30					欠番
SK31		楕円?		0.2	
SK32	○SK38	円	1.2	0.6	陶器を埋設、底は漆喰塗り、便槽
SK33		長方	長辺1.7 短辺0.9	0.2	
SK34	×SK13	方？	短辺0.6	0.1	
SK35		楕円	長軸0.6 短軸0.4	0.05	遺構の残骸か
SK36		方	0.9	0.1	
SK37	○SK38	円	0.6	0.15	
SK38	×SK32・37 ○SK41	円	2	0.25	
SK39					欠番
SK40	？SD4・11	方	東西5 南北2.5	0.3	
SK41	×SK38	円?	1.5	0.1	
SK42	×SK55		短軸1.3	0.6	
SK43		楕円	長軸1.2 短軸0.7	0.1	
SK44		長方	長辺1.5以上 短辺0.8	0.8	SK45と対応するか、撹乱の可能性もあり
SK45	○SK49	長方	長辺2 短辺1	0.7	SK44と対応するか、撹乱の可能性もあり
SK46		不整	長軸1.4 短軸0.9	0.1	遺構の残骸か
SK47		円	0.9	0.05	ピット状凹みあり、遺構の残骸か
SK48		不整	0.8	0.53	
SK49	×SK45	不整	東西3 南北3.2	0.4	
SK50					欠番
SK51		円	0.4	0.15	埋甕、内面は漆喰塗り、便槽か
SK52		円	0.4	0.25	埋甕、内面は漆喰塗り、便槽か、埋土から肥後守・金槌出土
SK53		円	0.4	0.15	埋甕痕跡か
SK54					欠番
SK55	×SK14　？SD7			0.5以上	
SE1		円	掘方1.6 石組内法0.7	2.6	底は標高10.4m
SE2		円	掘方1.7 石組内法0.8	2	底は標高11.1m、戦災焼土で埋没、石組の下に井桁状の木組み
SE3		円	掘方2 石組内法1	2.4	底は標高10.7m
SE4		円	掘方2.4 石組内法0.6	2.9	底は標高10.4m、同標高に湧水層、石組の下に井桁状の木組みあり、遺物は極少
SE5		円	掘方1.3 石組内法0.5		大半が調査区外のため深さ不明
SD1	○SK7		幅1.2	0.3～0.6	底の標高は北端11.9m/中央12.4m/南端12.4m、SK7以北が深い
SD2	○SK6		幅0.4	0.2	底の標高は北端12.4m/中央12.35m/南端12.35m、標高ほぼ一定
SD3			幅1.2～1.7	0.6～0.9	底の標高差は少ない（標高約11.9m）、底に凹凸あり、南端で西に枝分かれ、寺院と武家屋敷の間の背割溝
SD4			幅0.5	0.3	底の標高は東端12.55m/西端12.45m
SD5			幅0.6～1	0.4	底の標高は北端12.65m/南端12.5m
SD6			幅0.4	0.05～0.2	底の標高は北端12.75m/中央12.75m/南端12.8m
SD7	○SK34　×SK13･14			0.25	SD7-1・2・3・4の総称、溝同士の切り合い関係は不明
－1			幅0.4	0.2	底の標高は東端12.85m/中央12.85m/西端12.8m
－2			幅0.4	0.1	底の標高は東端12.9m/西端12.9m

遺構番号	切り合い関係	平面形	規模(m)	深さ(m)	備考
－3			幅0.4	0.1	底の標高は東端12.9m/西端12.85m
－4			幅0.3	0.2	底の標高は東端12.85m/中央12.75m/西端12.75m、SD7-1との間をつなぐように細い溝が2条あり
SD9					欠番
SD10					欠番
SD11			幅0.3		底の標高は東端12.9m/西端12.8m

※切り合い関係：×＝切られる、○＝切る、？＝不明

表３　出土遺物観察表

番号	種別	器種	出土遺構／層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考
1	施釉陶器	碗	SK1／2層	10.1	5.9	(4.35)	京・信楽系　見込みに目痕3箇所あり　高台内に墨書「勘」
2	施釉陶器	碗	SK1／2・3層	11.2	5.3	4.1	京・信楽系　見込みに目痕3箇所あり　高台内に墨書「勘」　高台外周に墨書「未十二月四日」
3	施釉陶器	碗	SK1／2層	(11.4)	4.8	3.55	京・信楽系　見込みに目痕3箇所あり　高台内に墨書「勘九」
4	施釉陶器	碗	SK1／2・3層	(11.5)	8.05	5	瀬戸・美濃焼拳骨碗　高台に花の刻印
5	施釉陶器	碗	SK1／1層	(11.25)	7.75	4.7	瀬戸・美濃焼焼拳骨碗　高台畳付に刻印「上△」、墨書「て□」
6	施釉陶器	向付	接合：SK1／2層　SK19	13.3	5.6	12.4	瀬戸・美濃焼志野　大半の破片はSK19のもの
7	施釉陶器	碗	SK3			2.7	高台内に墨書「勘七」
8	施釉陶器	碗	SK5	11.1	6.6	4.55	京・信楽系　見込みに目痕3箇所あり　高台内に墨書「勘九」　高台外周に墨書「安永九年庚子㛹九月二日請取之」
9	施釉陶器	碗	SK5／10・11層	10.1	6.35	4.15	内面に横方向の擦痕
10	施釉陶器	蓋	SK12				内面に人面（達磨か）の墨書
11	施釉陶器	皿	SK25	11.4	2.8	5.5	肥前系　内面に胎土目痕あり　高台畳付に胎土目付着
12	土師器	皿	SK25	9.6	2.1	6.45	底部ヘラ切り未調整　灯明皿（内面から口縁にかけて煤付着）
13	施釉陶器	碗	SK29	(10.8)	(5.55)		肥前系　藁灰釉
14	施釉陶器	皿	SK29	(10.65)	2.6	(4)	肥前系
15	土師器	皿	SK29	(13.9)	(3.1)		灯明皿（内面に煤付着）　非糸切り　内面と口縁部外面は回転ナデ
16	土師器	皿	SK29	9.6	2.35		外面底部に板状圧痕あり　非糸切り　外面底部以外回転ナデ
17	土師器	皿	SK29	9.75	2.4		灯明皿（内外面に煤付着）　非糸切り　外面底部以外回転ナデ　外面には強い回転ナデにより底部端に段差あり
18	土師器	皿	SK29	9.7	2.4		外面底部に板状圧痕あり
19	施釉陶器	碗	SK49／2・3層	10.2	5.35	4.6	京・信楽系　見込みに目痕3箇所あり　高台内に墨書「勘」と周囲に不明墨書
20	施釉陶器	碗	SK49	11	5.7	4.7	京・信楽系　見込みに目痕3箇所あり　高台内に墨書「勘正」　高台畳付に墨書「一月十一日」
21	施釉陶器	碗	SK49／4・5層			4.3	京・信楽系　見込みに目痕3箇所あり　高台内は墨で塗潰し　高台畳付に墨書「明和□□年九月十二日」
22	施釉陶器	碗	SK49／4・5層	(10.2)			京・信楽系
23	施釉陶器	碗	SK49／2・3層			4.2	京・信楽系　見込みに目痕3箇所あり　墨書なし
24	施釉陶器	碗	SK49／2・3層	(12.05)	7.6	5	瀬戸・美濃焼拳骨碗　高台畳付に刻印「上△」
25	施釉陶器	碗	接合：SD1－1区／6～8層 SK13	11	5.3	4.3	京・信楽系　見込みに目痕3箇所あり　高台内に墨書「勘　□六月二日」　高台外周に墨書「図永三□□月二日」
26	施釉陶器	碗	SD1	10.6	5.8	4.2	京・信楽系　見込みに目痕3箇所あり　高台内外に墨書あるが大半消えており判読不可
27	施釉陶器	碗	SD1－2区			4.6	京・信楽系　見込みに目痕3箇所あり　高台内に墨書「勘十」
28	施釉陶器	碗	SD1－2区／11・15・16層	(10.75)	8.7	4.8	瀬戸・美濃焼拳骨碗　高台畳付に花の刻印
29	施釉陶器	碗	SD3－4区／29層	11	6.65	4	肥前系　天目碗

番号	種別	器種	出土遺構／層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考
30	施釉陶器	碗	SD3－1区／底	13	6.95	4.8	軟質　京焼系か　細かい貫入が入る
31	施釉陶器	小杯	SD3－4区／22～28層	(6.6)	2.75	(2.4)	瀬戸・美濃焼志野
32	施釉陶器	皿	SD3－3区／15・16層	11.1	2.9	3.9	肥前系　高台畳付に胎土目痕あり
33	施釉陶器	皿	SD3－4区／22～28層	(10.2)			肥前系
34	陶器	擂鉢	SD3－1区／落ちの中				備前焼　斜め方向の摺目　近世1b期
35	陶器	小壺	SD3－1区／落ちの中			4	備前焼　底部糸切り　火襷
36	金属器	銅銭	SD3－4区／22～28層	径2.3	厚0.1		
37	土師器	皿	SD3－1区／落ちの中	15	2.9	3.6	底部非糸切り　外面底部と見込みに黒斑
38	土師器	皿	SD3－1区／調査区西壁89層	14.2	3	4.35	底部非糸切り　内外面に黒斑
39	土師器	皿	SD3－1区／落ちの中	14.2	2.8	4.4	底部非糸切り　外面に黒斑　内面全体に煤付着
40	土師器	皿	SD3－2区／15・16層	(13.9)			底部非糸切り　内外面に黒斑
41	土師器	皿	SD3－1区／落ちの中	13.6	2.6	4	底部非糸切り
42	土師器	皿	SD3－4区／22～28層	11.3	3.1		底部非糸切り　灯明皿（口縁部に煤付着）
43	土師器	皿	SD3－4区／22～28層	11.1	2	3.8	底部非糸切り
44	土師器	皿	SD3－4区／22～28層	11	2.5		底部非糸切り　灯明皿（口縁部に煤付着）
45	土師器	皿	SD3－1区／11・12層	(10.7)	2.2		底部非糸切り
46	土師器	皿	SD3－1区／11・12層	10.6	2.4	4.2	底部非糸切り
47	土師器	皿	SD3－3区／15・16層	10.4	2.2	3	底部非糸切り
48	土師器	皿	SD3－1区／落ちの中	9.3	2		底部非糸切り　外面に黒斑
49	土師器	皿	SD3－4区／22～28層				底部非糸切り
50	土師器	皿	SD3－4区／22～28層	11.2	2.5		
51	土師器	皿	SD3－4区／22～28層	(11.3)	2.35		底部に板状工具の角状の圧痕あり
52	土師器	皿	SD3－4区／22～28層	(11.3)	2.2		底部に板状工具の角状の圧痕あり
53	土師器	皿	SD3－4区／22～28層	11.15	2.55		底部に板状工具の角状の圧痕あり
54	土師器	皿	SD3－4区／22～28層	10	2.25		底部ヘラ切り　灯明皿（口縁部に煤付着）
55	土師器	皿	SD3－3区／15・16層	(9.8)	2.3		底部ヘラ切りか　内外面に黒斑
56	土師器	皿	SD3－1区／11・12層	9.7	2.3		底部ヘラ切りか
57	土師器	皿	SD3－4区／29層	(9.05)	2.2		底部ヘラ切りか
58	土師器	皿	SD3－4区／22～28層	7.6	1.75		底部ヘラ切りか
59	土師器	皿	SD3－4区／22～28層	7.6	1.75		底部ヘラ切りか
60	土師器	皿	SD3－4区／22～28層	7.5	1.7		底部ヘラ切りか
61	土師器	皿	SD3－4区／22～28層	7	1.7		底部ヘラ切りか
62	土師器	皿	SD3－4区／22～28層				底部ヘラ切りか
63	土師器	皿	SD3－4区／29層	9.4	2.3		底部非糸切り　灯明皿（口縁内外面に煤付着） 外面底部に板状圧痕
64	土師器	皿	SD3－1区／落ちの中	(9.25)	2.2		底部非糸切り　灯明皿（口縁内外面に煤付着） 外面底部に板状圧痕
65	土師器	皿	SD3－1区／落ちの中	9.2	2		外面底部に板状圧痕
66	土師器	皿	SD3－3区／15・16層	10.3	2.45	5.65	底部糸切り
67	土師器	皿	SD3－1区／落ちの中	(9.6)	2.1	5.4	底部糸切り
68	土師器	皿	SD3－3区／15・16層	9	2.15	5.1	底部糸切り　灯明皿（口縁部内外面に煤付着）
69	土師器	皿	SD3－3区／15・16層	8.6	2.1	5.2	底部糸切り
70	土師器	皿	SD3－3区／15・16層	(9.8)	1.85	(4.55)	底部糸切り
71	土師器	皿	SD3－3区／15・16層	9.15	2.65	5.15	底部糸切り
72	土師器	皿	SD3－4区／22～28層	(9.0)	1.7	(5.6)	底部糸切り
73	土師器	皿	SD3－3区／15・16層	8.4	2.0	4.4	底部糸切り
74	土師器	皿	SD3－3区／15・16層	(9.45)	2.8	5.15	底部糸切り

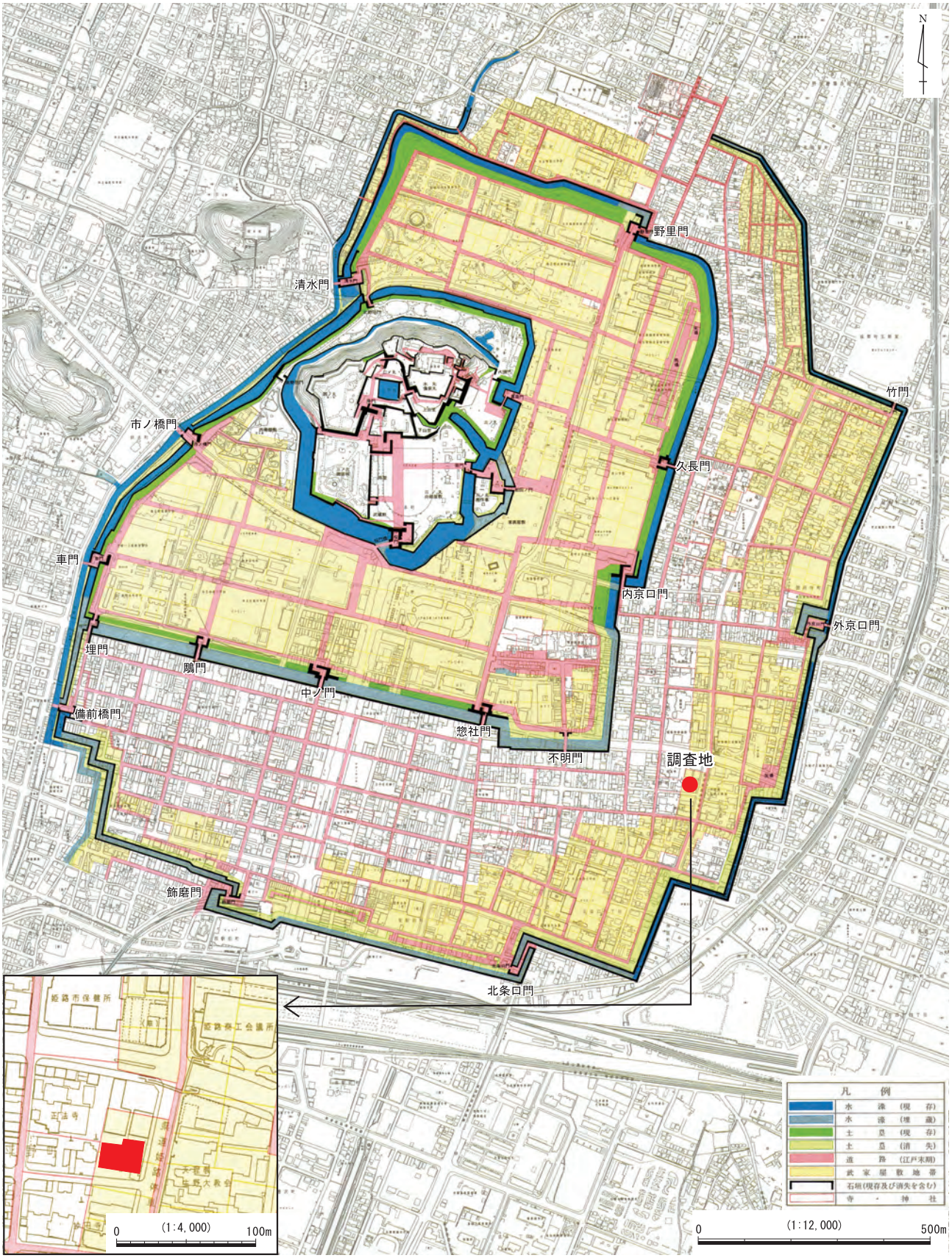

N
野里門
清水門
竹門
市ノ橋門
久長門
車門
内京口門
外京口門
埋門
鵤門
中ノ門
備前橋門
惣社門
不明門
調査地
飾磨門
北条口門
凡例
水濠（現存）
水濠（埋没）
土塁（現存）
土塁（消失）
道路（江戸末期）
武家屋敷地帯
石垣（現存及び消失を含む）
寺・神社
0
(1:12,000)
500m
0
(1:4,000)
100m

図１　調査位置図

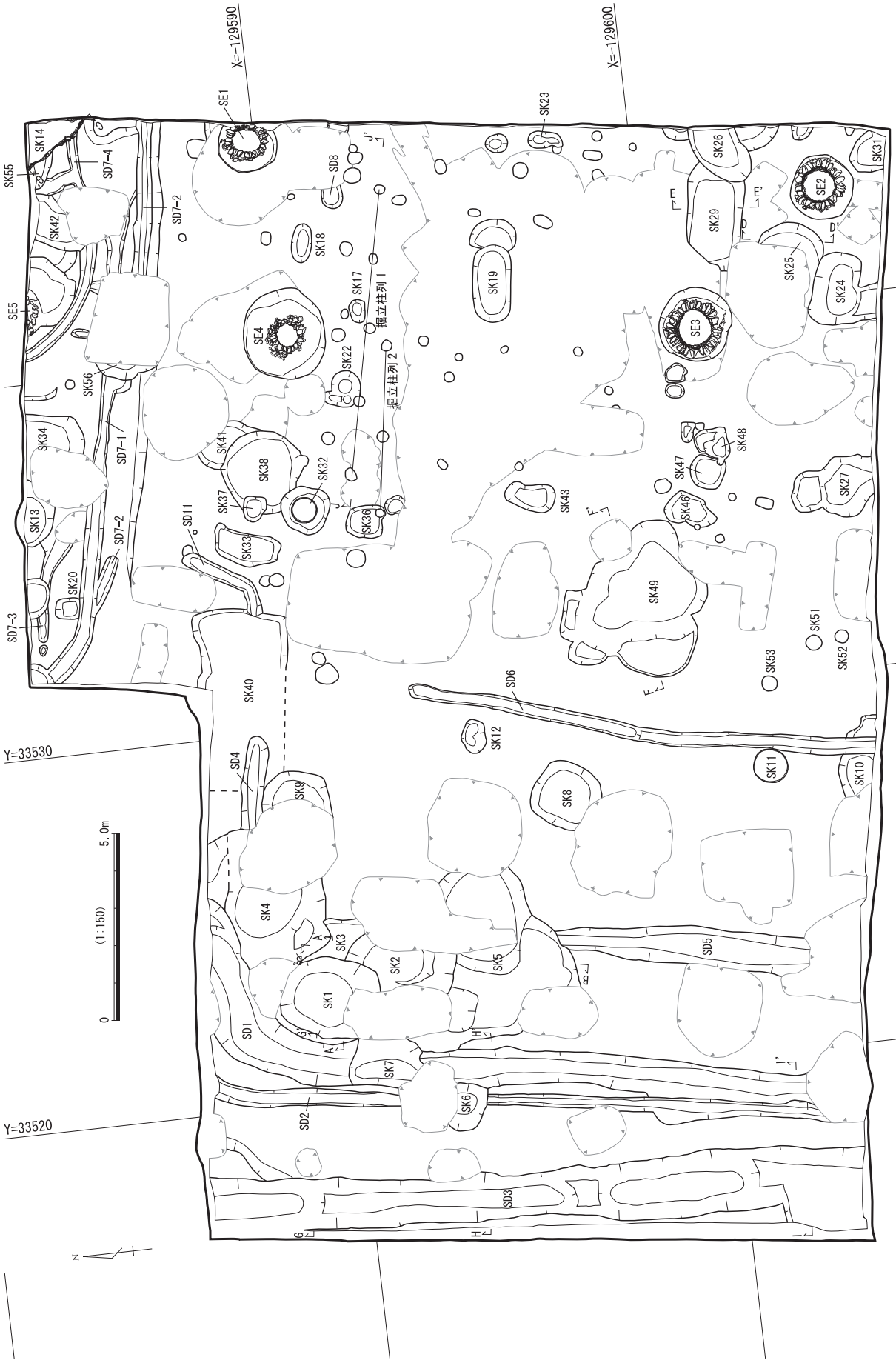
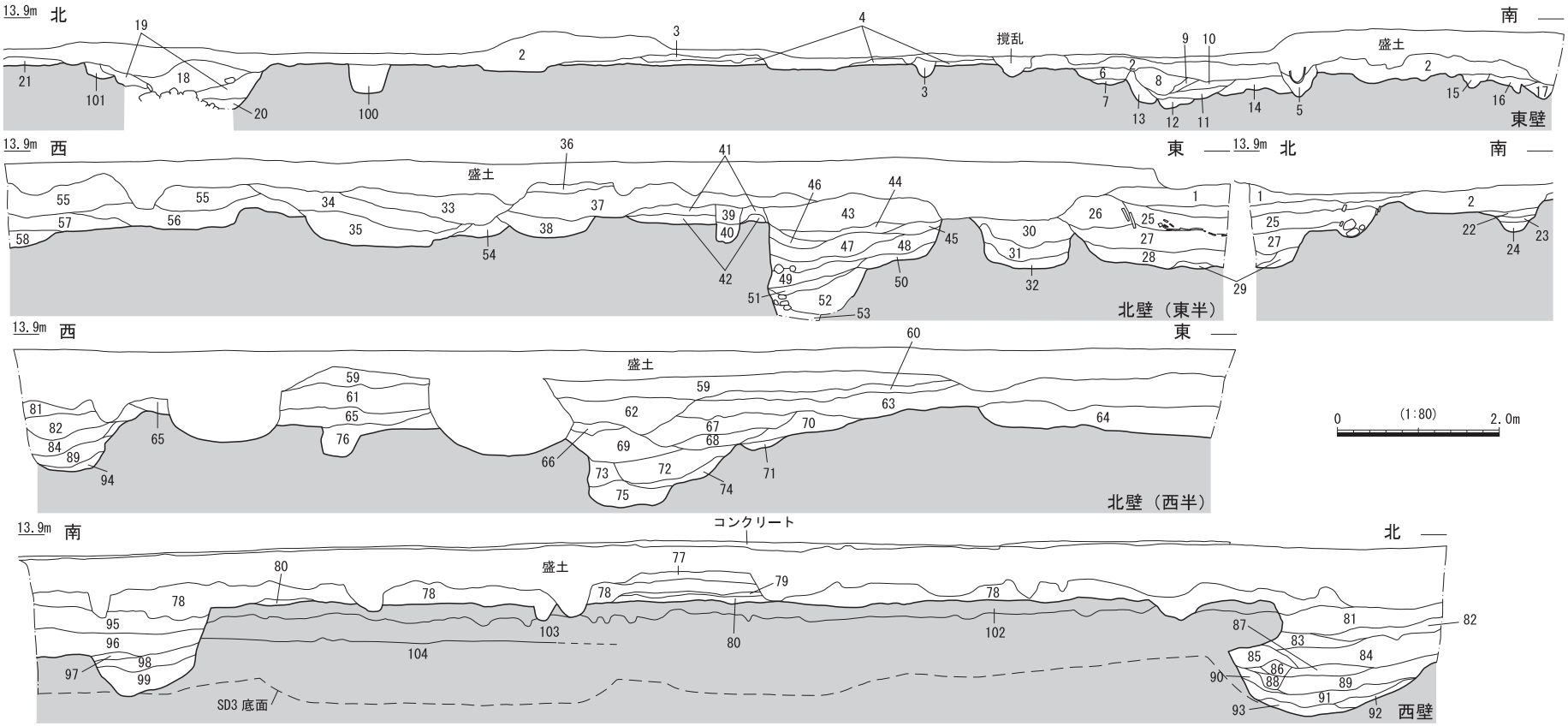

X=-129590
X=-129600
Y=33540
Y=33530
Y=33520
SE1
SE2
SE3
SE4
SE5
SK1
SK2
SK3
SK4
SK5
SK6
SK7
SK8
SK9
SK10
SK11
SK12
SK13
SK14
SK17
SK18
SK19
SK20
SK22
SK23
SK24
SK25
SK26
SK27
SK29
SK31
SK32
SK33
SK34
SK36
SK37
SK38
SK40
SK41
SK42
SK43
SK46
SK47
SK48
SK49
SK51
SK52
SK53
SK55
SK56
SD1
SD2
SD3
SD4
SD5
SD6
SD7-1
SD7-2
SD7-3
SD7-4
SD8
SD11
掘立柱列１
掘立柱列２
0
(1:150)
5.0m
N

図２　調査区平面図

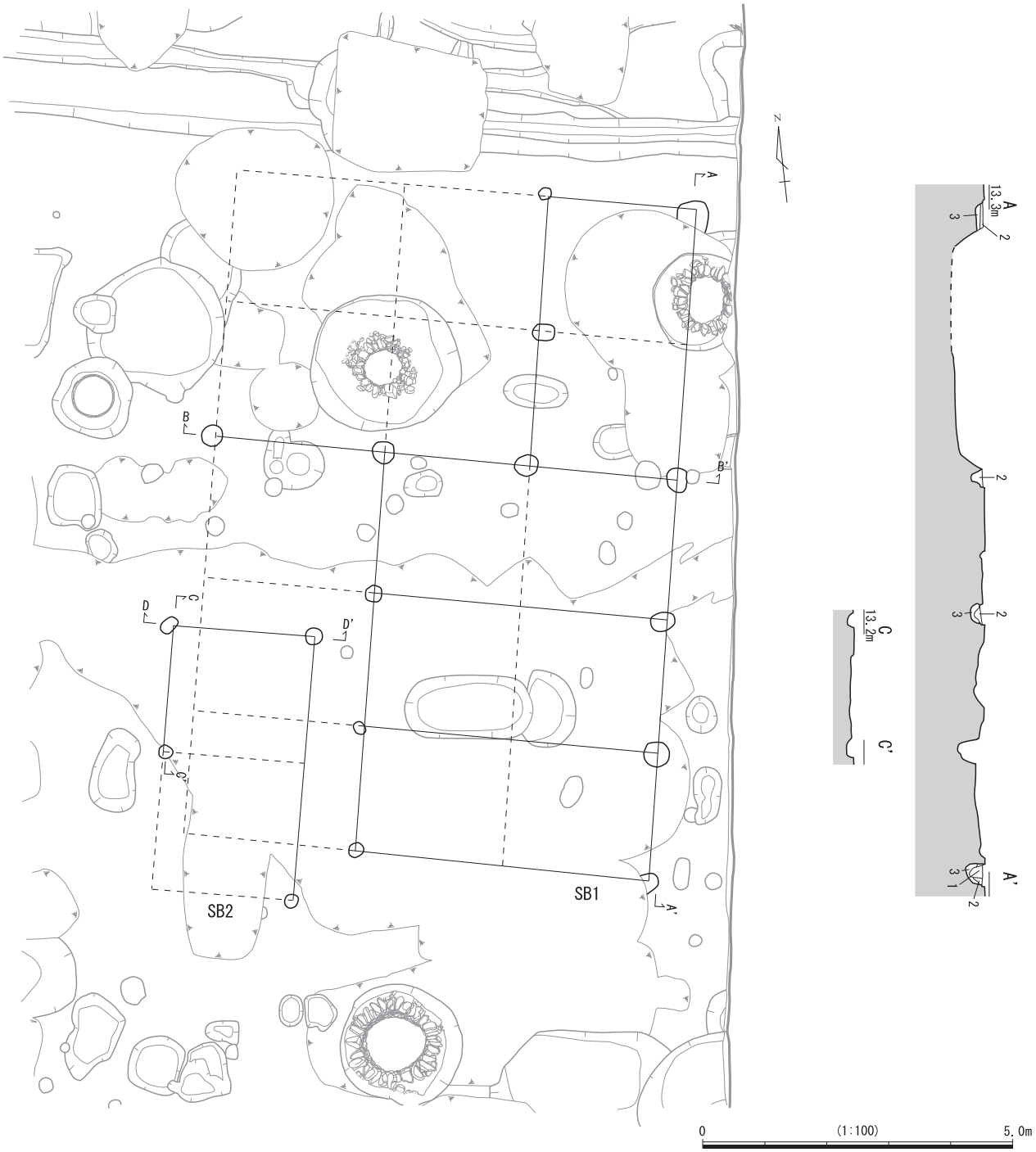


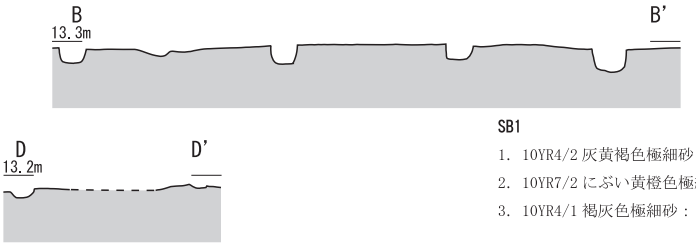
1. 10YR4/3 にぶい黄褐色極細砂：炭粒を稀に含む。　2. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂　3. 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細砂　4. 2.5Y5/4 黄褐色シルト　5. 10YR4/2 灰黄褐色細砂：埋甕掘方埋土。　6. 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細砂　7. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト：しまり弱、粘性やや強。　8. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂：SK26 埋土（8 ～ 12 層）。　9. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂　10. 10YR4/1 褐灰色極細砂　11. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂　12. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂：地山ブロックを含む。　13. 10YR4/3 にぶい黄褐色極細砂　14. 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂　15. 2.5Y4/2 暗灰黄色極細砂：地山ブロックを含む。　16. 10YR3/3 暗褐色シルト：しまりやや強。粘性やや弱。地山主体の層。SK31 埋土（16・17 層）。　17. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト　18. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂：SE1 掘方埋土（18 ～ 20 層）。　19. 2.5Y4/2 暗灰黄色極細砂　20. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂：黄色土ブロックを多く含む。　21. 2.5Y5/4 黄褐色シルト　22. 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂：SD7-2 埋土（22 ～ 23 層）。　23. 10YR4/2 灰黄褐色細砂　24. 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂　25. 10YR3/2 黒褐色極細砂混じり 2.5Y5/3 黄褐色極細砂：褐灰色地山ブロックを含む。SK14 埋土。　26. 2.5Y5/3 黄褐色極細砂：褐灰色地山ブロックをわずかに含む。SK55 埋土（26 ～ 29 層）。　27. 10YR4/2 灰黄褐色細砂　28. 10YR4/2 灰黄褐色細砂　29. 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂　30. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂：褐灰色地山ブロックを含む。SK42 埋土（30 ～ 32 層）。　31. 10YR4/3 にぶい黄褐色極細砂混じり 10YR3/1 極細砂：しまりやや弱、粘性やや弱。褐灰色地山主体の層。　32. 10YR3/2 黒褐色極細砂混じり 10YR4/3 極細砂：黄灰色地山主体の層。　33. 10YR4/2 灰黄褐色細砂：SK13 埋土（33 ～ 35 層）。　34. 2.5Y5/3 黄褐色極細砂　35. 10YR3/3 暗褐色粗砂：5 ～ 10cm 大の円礫を含む。　36. 2.5Y5/3 黄褐色極細砂　37. 注記漏れ。　38. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂：SK34 埋土。　39. 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂：SD7-4 埋土（39・40 層）。　40. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂　41. 2.5Y5/3 黄褐色極細砂：褐灰色地山ブロックを含む。　42. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細砂　43. 2.5Y5/3 黄褐色極細砂：炭・褐灰色地山ブロックを含む。SE5 埋土（43 ～ 53 層）。　44. 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂：炭粒を含む。　45. 2.5Y5/3 黄褐色極細砂　46. 10YR4/3 にぶい黄褐色極細砂　47. 2.5Y4/2 暗灰黄色細～中砂：シルトブロックを含む。　48. 2.5Y4/2 暗灰黄色細～中砂：炭粒を多く含む。　49. 10YR4/3 にぶい黄褐色細～中砂　50. 注記漏れ。　51. 2.5Y5/1 黄灰色シルト～極細砂：しまり弱、粘性やや強。　52. 10YR4/2 灰黄褐色細砂　53. 2.5Y5/1 黄灰色シルト～極細砂：しまり弱、粘性やや強。　54. 2.5Y4/1 黄灰色極細砂：炭粒を含む。　55. 2.5Y5/4 黄褐色極細砂：炭粒を稀に含む。SD7 埋土（55 ～ 58 層）。　56. 2.5Y5/3 黄褐色極細砂：炭粒を稀に含む。　57. 10YR4/2 灰黄褐色シルト：炭を多く含む。　58. 10YR4/1 褐灰色シルト：SD7-1 埋土。　59. 10YR3/2 黒褐色細砂：3cm 大の円礫、炭粒を含む。　60. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂：炭粒を多く含む。　61. 2.5Y4/2 暗灰黄色極細砂　62. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂　63. 10YR4/2 灰黄褐色細砂　64. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂:褐灰色地山ブロックを含む。SK40 埋土。　65. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂:褐灰色地山ブロックを稀に含む。SD1・2・3ー1 層。　66. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂：褐灰色地山ブロックを稀に含む。SD1 埋土（66 ～ 75 層）。　67. 10YR4/3 にぶい黄褐色極細砂:しまりやや弱、粘性弱。褐灰色地山ブロックを多く含む。　68. 2.5Y4/4 オリーブ褐色極細砂　69. 10YR5/2 灰黄褐色極細砂：3cm 大の円礫、炭粒を稀に含む。　70. 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細砂　71. 10YR4/3 にぶい黄褐色極細砂　72. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細砂～細砂：5cm 大の円礫を含み、炭粒を多く含む。　73. 10YR4/3 にぶい黄褐色極細砂：しまりやや弱、粘性弱。褐灰色地山ブロックを多く含む。　74. 2.5Y4/4 オリーブ褐色中砂：3cm 大の円礫を含む。　75. 2.5Y4/4 オリーブ褐色極細砂：炭粒を稀に含む。　76. 10YR5/2 灰黄褐色極細砂：2cm 大の円礫を含む。地山ブロックは含まない。SD2 埋土。　77. 2.5Y5/3 黄褐色極細砂：しまりやや弱、粘性やや弱。灰色のシルトブロックを多く含む。地山ブロックは含まない。　78. 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細砂：黄灰色地山ブロックを稀に含む。SD3 埋土 78 ～ 99 層）。　79. 10YR4/2 灰黄褐色シルト:しまりやや弱、粘性弱。地山主体の層。　80. 10YR3/3 暗褐色極細砂：しまりやや強、粘性やや弱。　81. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂：2cm 大の円礫をまばらに含む。　82. 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細砂　83. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂：褐灰色地山ブロックを含む。　84. 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細砂～細砂：黄褐色粗砂ブロックを含む。　85. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト：しまり弱、粘性やや弱。　86. 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂：5cm 大の円礫を多く含む。　87. 10YR4/2 灰黄褐色シルト：しまり弱、粘性やや弱。　88. 10YR4/4 褐色極細砂～細砂　89. 2.5Y5/3 黄褐色極細砂　90. 10YR5/2 灰黄褐色シルト　91. 10YR5/2 灰黄褐色シルト：90 層よりやや灰色強い。　92. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト：褐灰色地山ブロックを多く含む。　93. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト　94. 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂：2cm 大の円礫を含む。　95. 2.5Y5/3 極細砂：しまりやや弱、粘性弱。灰色のシルトブロックを多く含み、地山ブロックは含まず。　96. 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂：黄色極細砂ブロックを含む。　97. 10YR4/2 灰黄褐色中砂　98. 10YR4/2 灰黄褐色中砂：3cm 大の礫を含む。褐灰色地山ブロックを含む。　99. 10YR4/2 灰黄褐色中砂：褐灰色地山ブロックを含まない。　100. 2.5Y4/1 黄灰色極細砂:SD8 埋土。　101. 2.5Y4/1 黄灰色極細砂　102. 10YR3/3 暗褐色極細砂：しまりやや強、粘性やや弱。地山。　103. 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細砂:しまりやや強、粘性やや弱。地山。104. 10YR3/3 暗褐色極細砂：しまりやや強、粘性やや弱。地山。

※「しまり弱、粘性弱」については注記から省略。
※層番号は必ずしもその前後関係をしめすものではない。

図３　調査区断面図

図版３

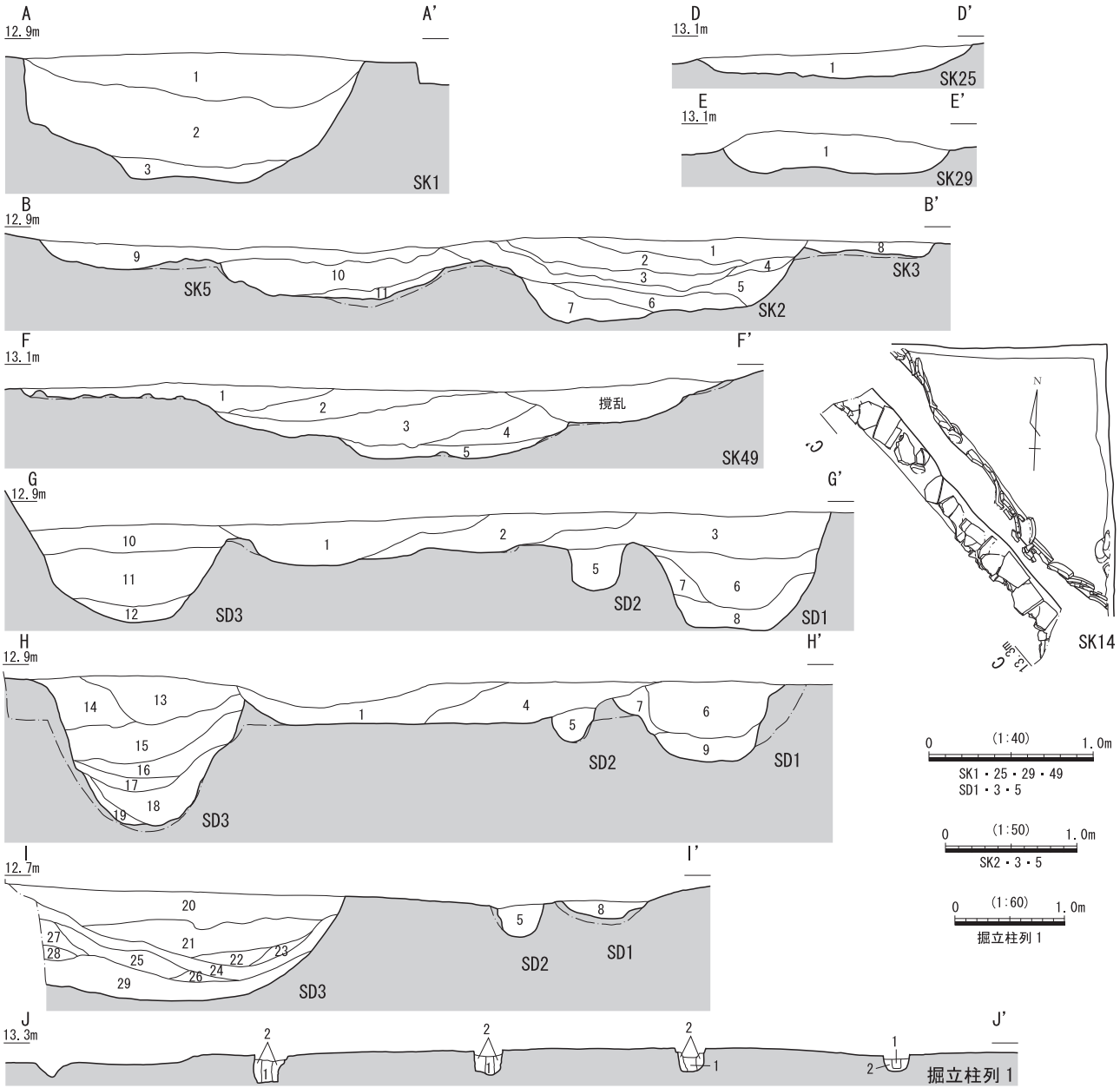




SB1

1. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂：しまり弱、粘性弱。炭粒を多く含む。柱痕。
2. 10YR7/2 にぶい黄橙色極細砂：しまり弱、粘性弱。掘方埋土。
3. 10YR4/1 褐灰色極細砂：しまり弱、粘性弱。掘方埋土。

図４　ＳＢ１・ＳＢ２　平・断面図



SK1　1. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト：しまり弱、粘性弱。下半に褐灰色地山を多く含む。　2. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂礫：しまり弱、粘性弱。10cm 大の円礫・瓦・陶磁器を非常に多く含む。　3. 10YR4/3 にぶい黄褐色極細砂：しまり弱、粘性やや強。

SK2・3・5　1. 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細砂：しまり弱、粘性弱。　2. 2.5Y4/4 オリーブ褐色極細砂：しまり弱、粘性弱。灰色土ブロックを稀に含む。　3. 2.5Y4/1 黄灰色細砂混じり 10YR4/3 極細砂：しまり弱、粘性弱。5～10cm 大の円礫を多く含む。　4. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂：しまり弱、粘性弱。円礫を稀に含む。5. 10YR4/2 灰黄褐色細～中砂：しまり弱、粘性弱。礫は含まない。　6. 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂：しまり弱、粘性弱。褐灰色地山ブロックを含む。　7. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂：しまり弱、粘性弱。褐灰色地山ブロックを稀に含む。　8. 2.5Y5/3 黄褐色極細砂：しまり弱、粘性弱。　9. 2.5Y5/3 黄褐色細砂：しまり弱、粘性弱。褐灰色地山ブロックを稀に含む。　10. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂：しまり弱、粘性弱。平瓦を非常に多く含む。　11. 2.5Y5/4 黄褐色細砂：しまり弱、粘性弱。

SK25　1. 2.5Y5/2 細砂：しまり弱、粘性弱。炭粒を稀に含む。

SK29　1. 2.5Y4/2 極細砂：しまり弱、粘性弱。炭粒を多く含む。

SK49　1. 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細砂：しまり弱、粘性弱。稀に炭粒・褐灰色地山ブロックを含む。　2. 2.5Y4/2 暗灰黄色極細砂：しまり弱、粘性弱。炭粒を含む。　3. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂：しまり弱、粘性弱。10cm 大の円礫を含む。　4. 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細砂～細砂：しまり弱、粘性弱。黄色土ブロックをまばらに含む。　5. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂：しまり弱、粘性弱。上半に褐灰色地山ブロックを含む。

SD1・2・3　1. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂：しまり弱、粘性弱。褐灰色地山ブロックを稀に含む。　2. 10YR4/3 にぶい黄褐色極細砂：しまり弱、粘性弱。褐灰色地山ブロックを含む。　3. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂：しまり弱、粘性弱。灰を稀に含む。褐灰色地山ブロックを含む。　4. 10YR4/2 灰黄褐色細砂：しまり弱、粘性弱。　5. 10YR5/2 灰黄褐色極細砂：しまり弱、粘性弱。2cm 大の円礫を含む。地山ブロックは含まない。　6. 10YR3/2 黒褐色細砂:しまり弱、粘性弱。5～10cm 大の円礫を多く含む。　7. 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂:しまり弱、粘性弱。8. 10YR4/2 灰黄褐色細砂：しまり弱、粘性弱。　9. 10YR4/2 灰黄褐色細砂：しまり弱、粘性弱。　10. 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂：しまり弱、粘性弱。黄色極細砂ブロックを含む。　11.10YR4/2 灰黄褐色中砂:しまり弱、粘性弱。3cm 大の礫、褐灰色地山ブロックを含む。　12.10YR4/2 灰黄褐色中砂:しまり弱、粘性弱。褐灰色地山ブロックを含まない。　13.2.5Y4/4 オリーブ褐色細～中砂：しまり弱、粘性弱。5cm 大の円礫、褐灰色地山ブロックを含む。　14. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂：しまり弱、粘性弱。下半に褐灰色地山ブロックを含む。　15. 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂：褐灰色地山ブロックを稀に含む。　16. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂：しまり弱、粘性弱。黄色土ブロックを含む。　17. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト：しまり弱、粘性強。18. 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂:しまり弱、粘性弱。　19. 10YR4/2 灰黄褐色細砂:しまり弱、粘性弱。　20. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂:しまり弱、粘性弱。褐灰色地山ブロックを稀に含む。21. 10YR4/3 にぶい黄褐色極細砂：しまり弱、粘性弱。褐灰色地山ブロックを含む。　22. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂：しまり弱、粘性弱。灰を稀に含む。褐灰色地山ブロックを含む。23. 10YR5/2 灰黄褐色極細砂：しまり弱、粘性弱。2cm 大の円礫を含む。地山ブロックは含まない。　24. 10YR3/2 黒褐色細砂：しまり弱、粘性弱。5～10cm 大の円礫を多く含む。25. 10YR4/2 灰黄褐色細砂：しまり弱、粘性弱。　26. 10YR4/2 灰黄褐色細砂：しまり弱、粘性弱。粘性弱。26 層よりやや灰色が強い。　27. 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂：しまり弱、粘性弱。黄色極細砂ブロックを含む。　28. 10YR4/2 灰黄褐色中砂：しまり弱、粘性弱。3cm 大の礫を含む。褐灰色地山ブロックを含む。　29. 10YR4/2 灰黄褐色中砂：しまり弱、粘性弱。褐灰色地山ブロックを含まない。

掘立柱列１　1. 2.5Y3/2 黒褐色細砂：しまり弱、粘性弱。柱痕。　2. 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細砂：しまり弱、粘性弱。掘方埋土。

図５　江戸時代の遺構　平・断面図

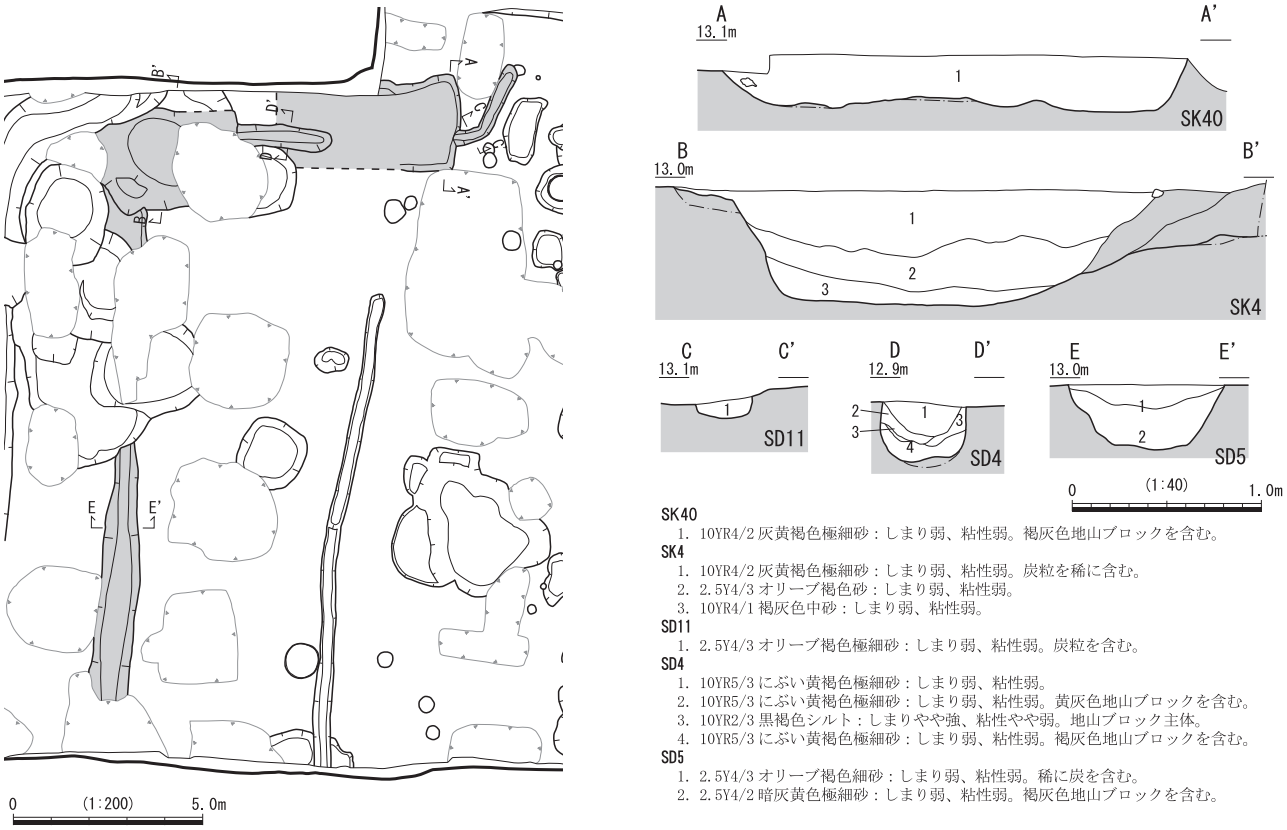


図６　ＳＫ４０・ＳＫ４・ＳＤ４・ＳＤ５・ＳＤ１１　平・断面図

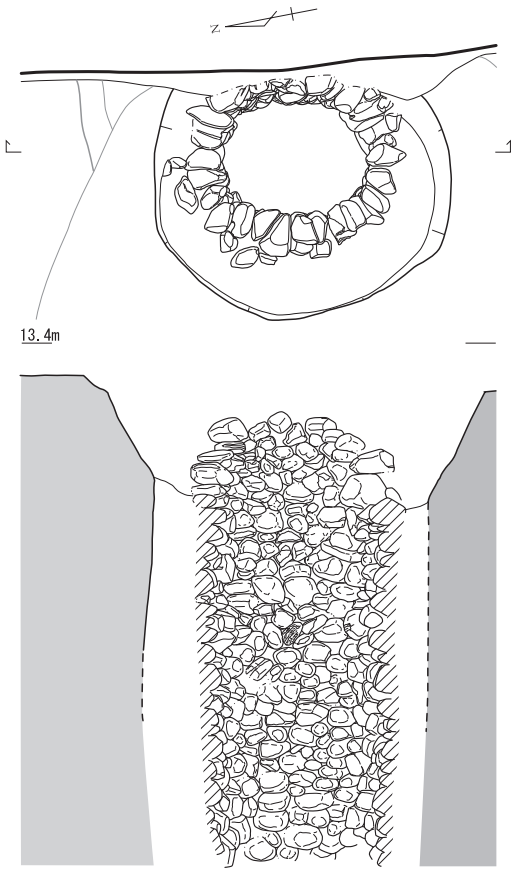


図７　ＳＥ１　平・断面図

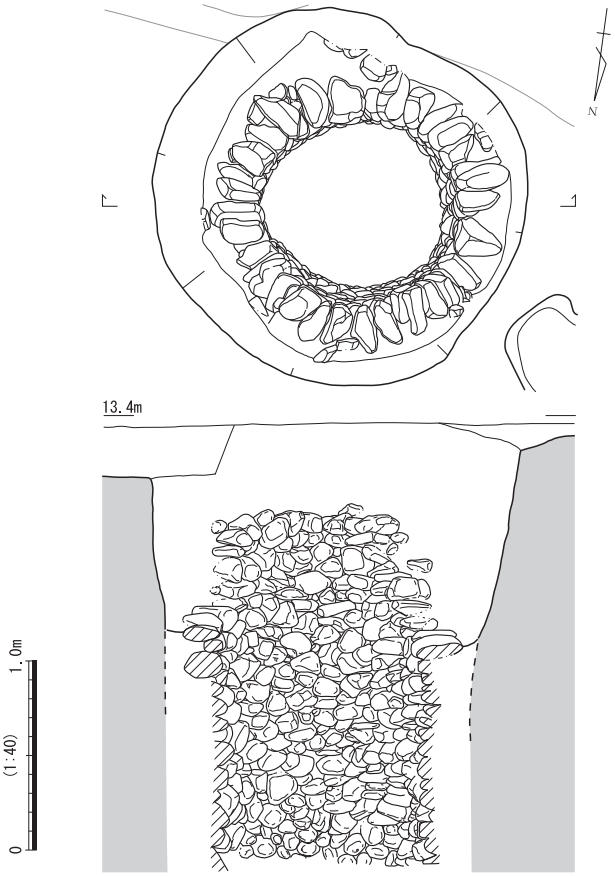


図８　ＳＥ３　平・断面図

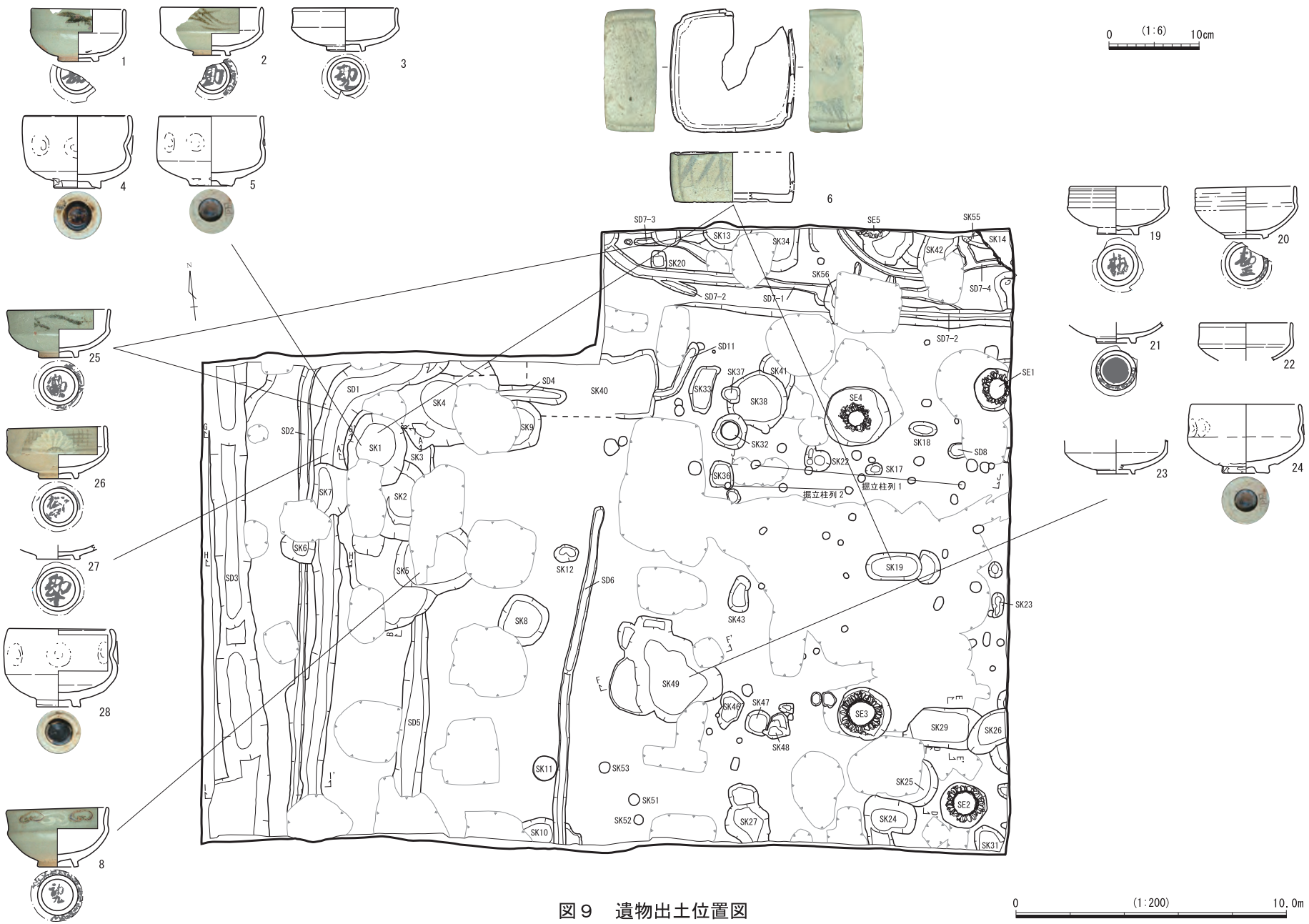
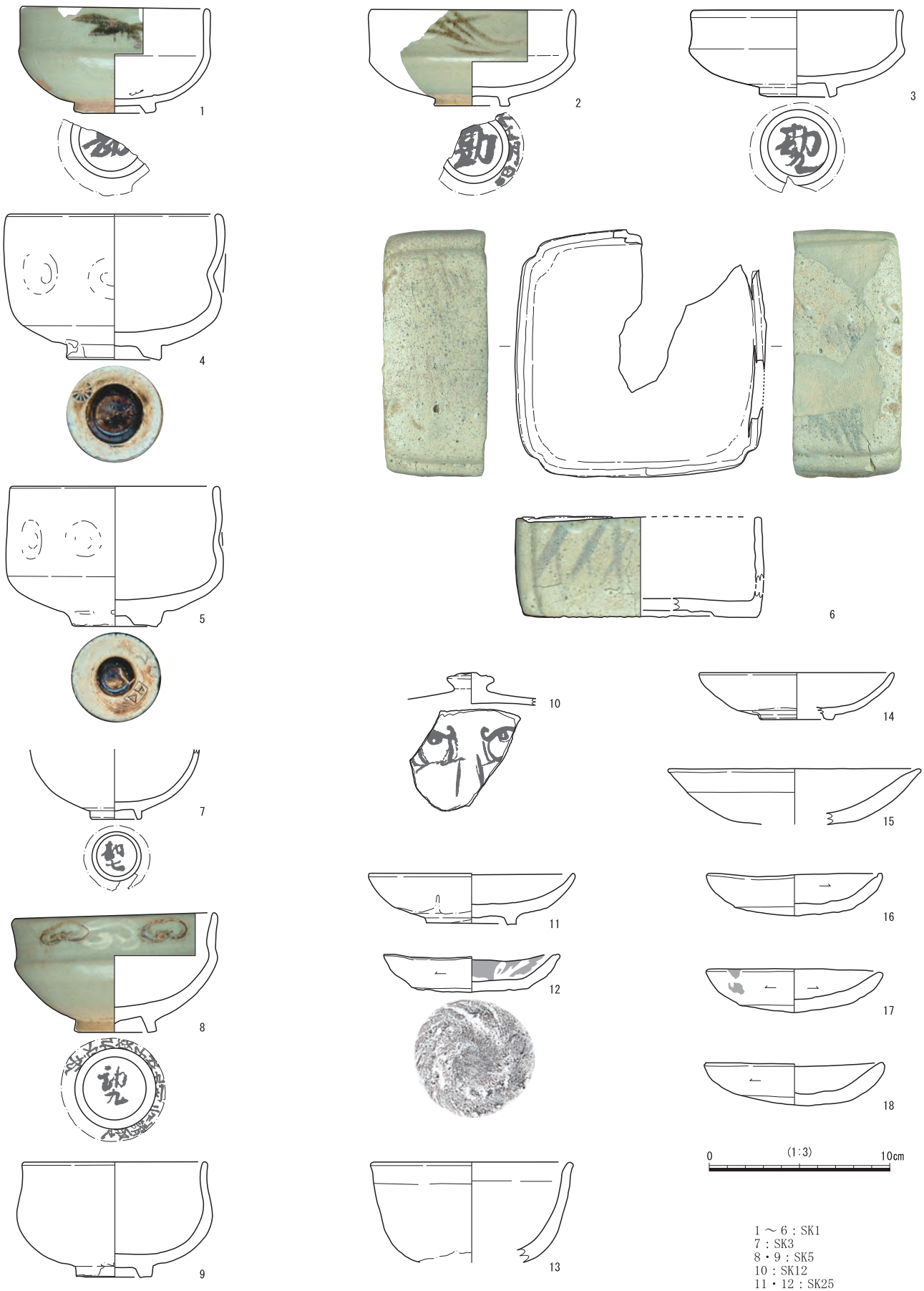

0 (1:6) 10cm
1
2
3
4
5
6
8
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
SD7-3
SK13
SK34
SE5
SK55
SK14
SK20
SK56
SK42
SD7-4
SD7-2
SD7-1
SD11
SK37
SK41
SK33
SK38
SE4
SE1
SK32
SK18
SD8
SK22
SK17
SK36
掘立柱列1
掘立柱列2
SD1
SK4
SD4
SK40
SK9
SD2
SK1
SK3
SK7
SK2
SK6
SK5
SD3
SK12
SD6
SK19
SK23
SK8
SK43
SK49
SK46
SK47
SK48
SE3
SK29
SK26
SK25
SE2
SK24
SK27
SK31
SK11
SK53
SK51
SK52
SK10
SD5
0 (1:200) 10.0m

図９　遺物出土位置図



1 ～ 6 : SK1
7 : SK3
8・9 : SK5
10 : SK12
11・12 : SK25
13 ～ 18 : SK29
※矢印は砂粒の動きを示す。

図１０　出土遺物（１）

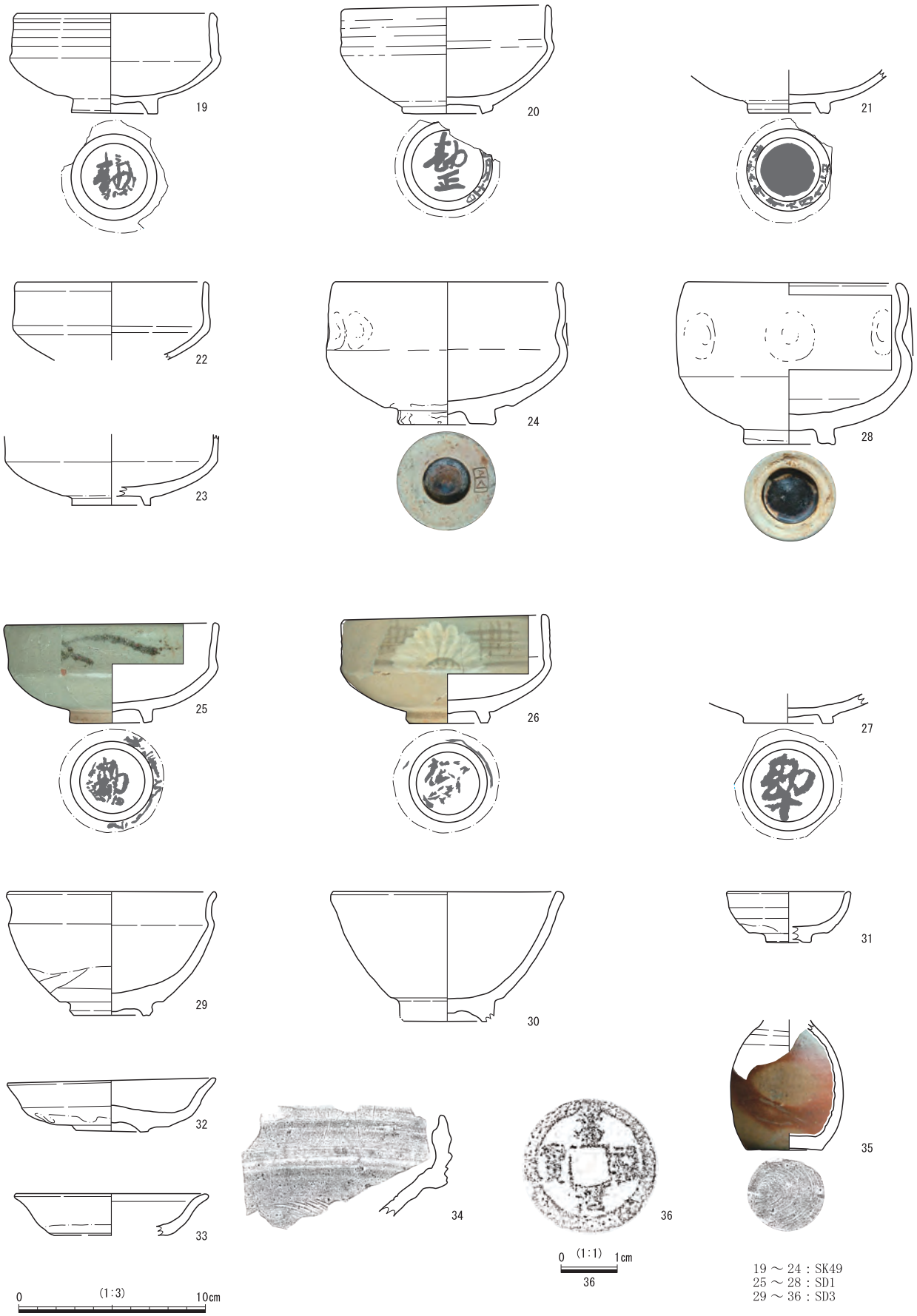

19
20
21
22
23
24
28
25
26
27
29
30
31
32
33
34
35
36
0 (1:3) 10cm
0 (1:1) 1cm
36
19 ～ 24 : SK49
25 ～ 28 : SD1
29 ～ 36 : SD3

図１１　出土遺物（２）

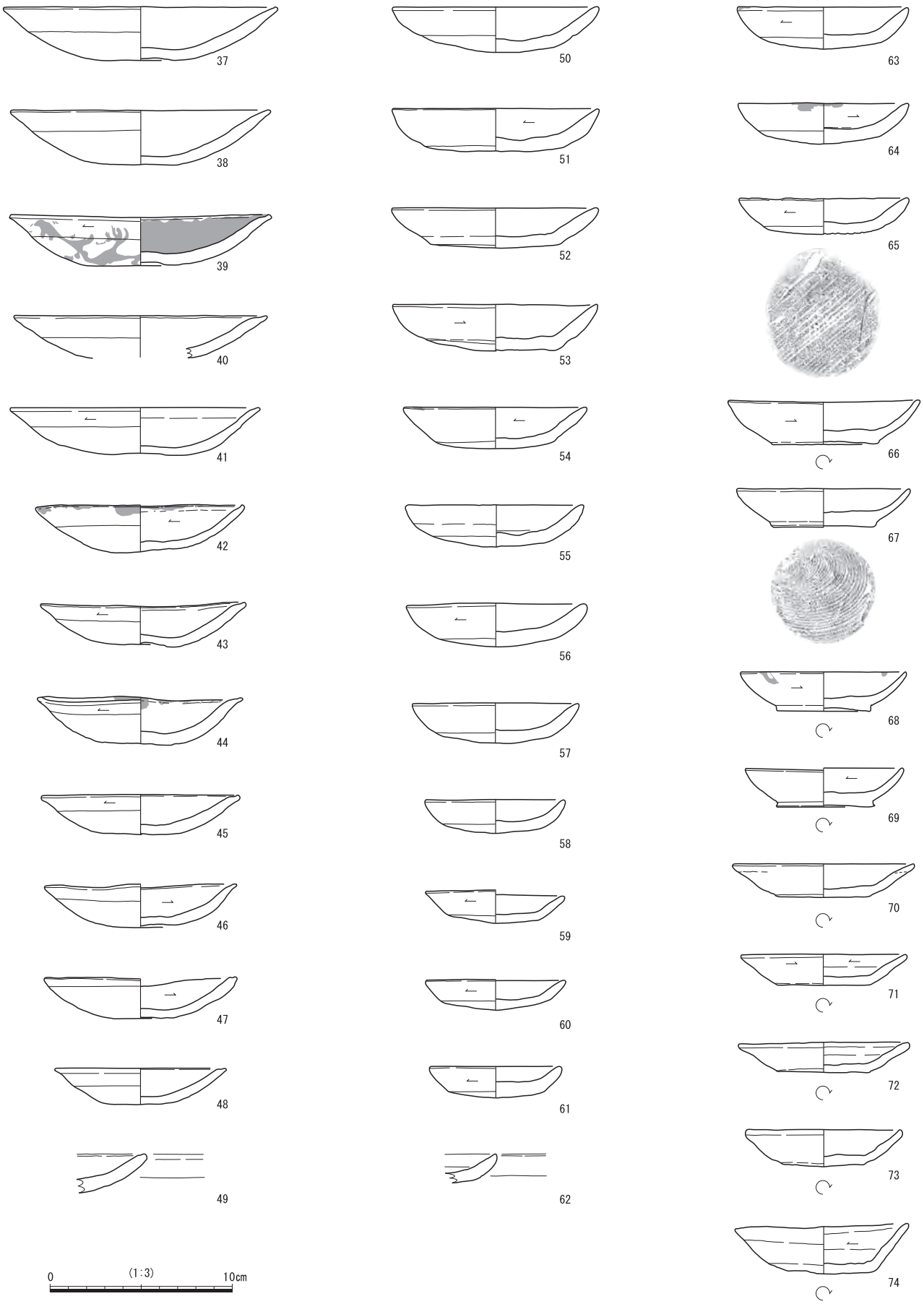


図１２　出土遺物（３）

37 ～ 74：SD3
※矢印は砂粒の動きを示す。

調査区西半（南東より）

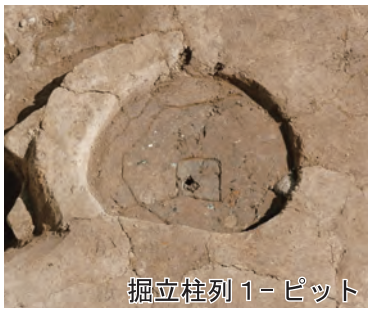
ＳＤ１・２（東より）

ＳＤ３（南より）

写真図版２

調査区東半（西より）

掘立柱列１（東より）



掘立柱列１－ピット

ＳＤ７（西より）

ＳＤ１１・ＳＫ４０（西より）

ＳＫ１　出土遺物（１）

ＳＫ１　出土遺物（２）

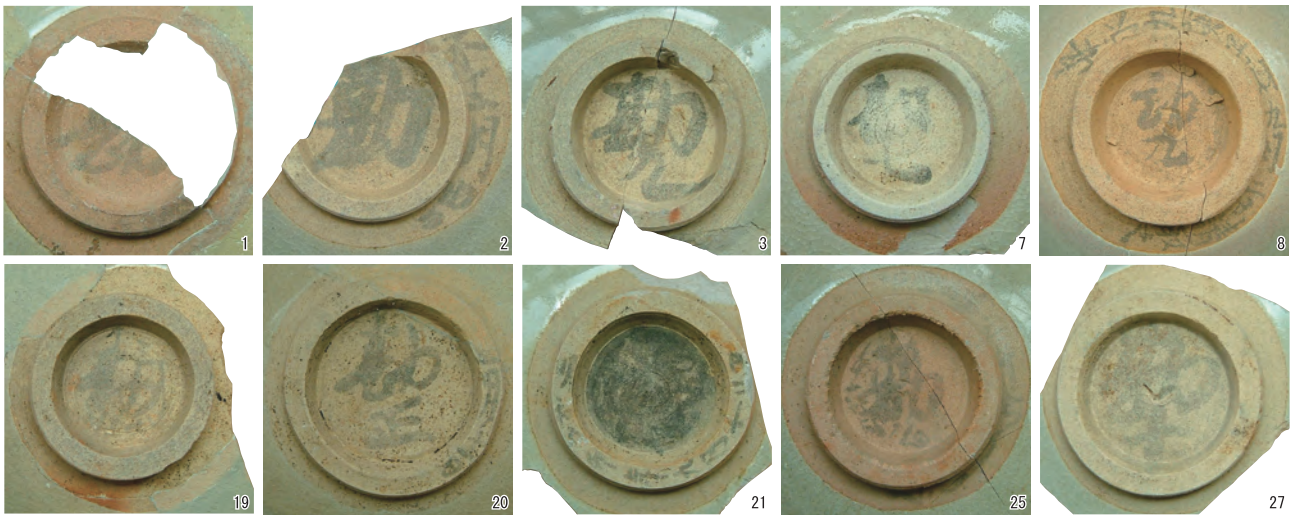
ＳＫ５　出土遺物

ＳＫ２５・ＳＫ２９　出土遺物

ＳＫ４９　出土遺物

ＳＤ１　出土遺物（１）

ＳＤ１　出土遺物（２）



高台内墨書

ＳＤ３　出土遺物（１）

SD3　出土遺物（２）

12

46

53

54

65

69

土師器皿底部

ＳＫ４・ＳＤ４・ＳＤ５　出土遺物

ＳＥ３　出土遺物（１）

ＳＥ３　出土遺物（２）

報告書抄録

ふりがな	ひめじじょうじょうかまちあと
書名	姫路城城下町跡
副書名	姫路城跡第 286 次発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第 12 集
編著者名	黒田　祐介
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター
所在地	〒671－0246　兵庫県姫路市四郷町坂元 414 番地 1
発行年月日	平成 26 年（2014 年）3 月 31 日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査番号
姫路城城下町跡（ひめじじょうじょうかまちあと）	姫路市平野町 52 番（ひめじしひらのまち）	28201	020457	34°49′52″	134°41′59″	2012.8.21 ～ 2012.10.5	579 ㎡	20120156

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
姫路城城下町跡	集落跡	江戸時代以前	掘立柱建物　溝	須恵器　土師器
		江戸時代	土坑　溝　井戸　掘立柱列	陶磁器　土師器　瓦　金属器

要約	姫路城の外曲輪、平野町で武家屋敷地の発掘調査を実施した。礎石等、屋敷建物に関係する遺構は確認できなかったものの、屋敷境の遺構や土坑・溝・井戸などを多数検出した。外曲輪で初めてとなる江戸時代初期の遺構も複数検出した。 遺物は江戸時代各期を通じて多量に出土している。中には墨書のある京・信楽系施釉陶器碗があり、その内容から年代が特定できるものもある。

姫路市埋蔵文化財センター調査報告　第 12 集

姫路城城下町跡
—姫路城跡第 286 次発掘調査報告書—

平成 26 年（2014 年）年 3 月 31 日　発行

編　　集　姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元 414 番地 1
TEL　(079)252-3950
発　　行　姫路市教育委員会
〒670-8501　兵庫県姫路市安田四丁目 1 番地
印刷・製本　内海印刷株式会社
〒670-0808　兵庫県姫路市白国五丁目12-41